

転生先はマブラヴ トータルイクリプス

Laura

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿です。

失踪しないよう頑張ります

マブラヴの世界に転生させられた青年

残酷な世界で青年は生きていく

18. 7. 18 設定な誤字報告有り修正いたしました。

18. 7. 18 2話も同じく

18. 7. 21 名前表記変更

18. 8. 14 4話「光学迷彩のあとにGN粒子散布を追加」

18.
9.
19
多数の誤字報告有り修正いたしました。

目次

設定

1

プロローグ

8

1話

13

2話

30

3話

43

4話

61

5話

84

6話

111

7話

133

8話

143

9話

168

10話

181

1話
2話

202 211

設定

主人公

氏名

霧島 春水（きりしま しゅんすい）

性別 年齢

男 18歳

Game「GENERATION OW」が好きな青年。転生因子を持った転生適合者であったため、神様によってMuv-luvの世界に転生することになる。人を食べるBETAに恐怖を抱くが生きるため戦うことを決意する。なお連邦機体よりジオン機体のほうが好き。

搭乗機体

CB-002

ラファエルガンダム

選択理由

主人公が好きな機体であったのと、BETAと戦うさいに接近したくないが為、遠距

離かつ殲滅可能であり、動力部の改造によってエネルギー切れが無くすることができるとの機体を選んだ。

武装

GNビームサーベル

GNクロー

GNビームライフル

GNバズーカ

GNビッグキャノン

特殊機能

GNフィールド

TRANS-AM (トランザム)

改造箇所

動力

擬似GNドライブ×3 ↓ オリジナルGNドライブ×3

武装

GNビームサーベル×1を追加

コックピット

全天周囲モニターに変更

排除

セラヴィーII分離、変形機構

防御機能

GNフィールド発生装置をバックパックに追加

戦艦

CBS—74

プロレマイオス2

武装

GNバルカン

GNキャノン

GNミサイル

魚雷発射管

特殊機能

GNフィールド

TRANS—AM（トランザム）

スモークディスプレイジャー

光学迷彩

改造箇所

MS搭載数10機に変更

拠点

小惑星アクシズ

AI

アプリロディア

主人公のサポートを担当。アクシズ内部の全てを統括

戦艦の航行やMSを無人機として扱い戦闘にも参加する。

内部

司令室

居住区

拡張前

拡張後

兵器開発区 戦艦1MS10↓戦艦3MS20

兵器格納区 変更無し

食料生産区 変更無し

食料保管庫 変更無し

軍港 変更無し

転生後アクシズ兵器格納区ならば軍港にある兵器類

MS

AMX-1008

ガ・ゾウム 20機

AMX-1009

ドライセン 20機 グレミー軍カラー

AMX-107

量産型バウ 30機 グレミー軍カラー

日本帝国に機体、設計図提供 機体は全部ではない

AMX-104

Rジャジャ 12機

ヨーロッパに機体、設計図提供

RGM-89

ジェガン 12機

国連に機体、設計図提供

RMS-099

リックディアス 12機 初期カラー

ソ連に機体、設計図提供

RMS—108

マラサイ 12機 ジオン残党カラー

アフリカ戦線に機体、設計図提供

RMS—117

ガルバルディβ 12機

大東亜戦線に機体、設計図提供

戦艦

LCAAM—01XA

アークエンジェル

日本帝国、政威大將軍に戦艦を提供

LCAAM—01XB

ドミニオン

ザンジバル

日本帝国に設計図提供

CCM—87

リリー・マルレーン

レウルーラ

ムサイ改×3

HLV×6 搭載数12に変更

プロローグ

授業が終わり足早に学校を後にする1人の青年

彼の名は

霧島 春水 (きりしま しゅんすい)

成績は平均

容姿は中の上

運動神経は優秀

しかし、運動はあまりせず毎日家でGameをplayする
インドア派である。

彼が足早に帰る理由はただひとつ

Game「G|G e n e r a t i o n O W」

早く続きをplayしたい

その為に彼は早く家に帰るのである。

1時間ほどして帰宅

「ただいま」

「おかえり〜」

母親に一言伝えた後、自室へ入り

制服を脱いで部屋着になった彼は早速Gameを起動した

「さて今日はどのステージをまわろうかな」

Game画面を見ながら暫く考えたのち、幾つかのステージを周回することにしてGameを開始

時間も気にせずひたすらクリアし続ける。

2時間後

「春水、ご飯出来たわよ」

春水は、母親の言葉を聞いて

「もうそんな時間か」

Gameを一時中断し

夕食を食べる為に部屋から出てリビングへ

「あんたまたGameばかりして、勉強はやったの？」

「大丈夫だよ。寝る前少しやるからさ」

夕食を食べながら、母親と会話する。

夕食後

自室にて

「さて続きをやるか」

一時中断していたGameを再開

1時後

Gameを終了したあと、風呂に入り疲れをとる

部屋に戻り

少し勉強をしたあと

明日の学校の準備をしてベットに横になる。

「はあ、いつかこの世界にもMSとかできないかな。」

遠い未来には出来るかもしれないが、春水が生きている間に出来る可能性は低いだろう。

春水もそれはわかっている

しかし、限り無く低い可能性だとしても

0%ではないと信じたい。

そして春水は寝りについた。

春水が寝て暫くして、彼の部屋に1人の老人が姿をあらわした

???

「この青年か」

老人は寝ている春水の顔をみる

???

「あの世界を救えるかも知れない数少ない転生適合者。しかし、まだ若いではないか」

老人は彼がこれから転生する場所を考えて表情が苦しげに歪む。

???

「儂らの力不足の為にいつ死ぬかもわからない世界に送ることをゆるしておくれ」

老人は春水にむかって手をかざした

そして彼の体は光に包まれ、この世界から消えた

???

「さて、あの青年に関する記憶も消さなければならんな」

老人はそう呟いた後、光に包まれ消えた

春水はこの世界で生きていた記録の全てを

老人によって消去された。

寝ている彼はまだ

自分に何が起きたのか

これから何が起きるのか

なにもわからない

ただ言えるのは

彼の何気ない平和な日常が終わりを告げた。

それだけは紛れもない事実である。

1話

???

「、る、や、、」

(・・・何か聞こえる。)

???

「お、るの、や、水」

(誰かが俺に話しかけているのか?)

呼び掛けに答えるように

春水の意識が徐々に覚醒していく。

???

「おきるのじゃ。春水」

春水は目を覚ましてすぐに思考が停止した。

部屋で寝ていたはずなのに、

草原に横たわり

視界にうつるのは見慣れた天井ではなく、

綺麗な青空がひろがっていたからだ。

春水

「何処だここ？」

???

「おきたようじゃな」

春水

「うお!!」

背後からかけられた声に、

春水は驚き地面から飛び起きた。

後ろに知らない人物がいる

春水は声のしたほうをおそるおそる振り向くと、

そこには1人の老人がこちらを見ていた。

春水

「あ、あなたはいつたい？それにここは？」

未だに混乱している春水は、

老人にたずねる。

???

「そなたに今の状況を説明するのじゃが、1度落ち着きなさい」

老人は春水に冷静になるようながす。

確かに今の彼には冷静に物事を判断するのは難しい

春水は何度か深呼吸し、心を落ち着かせる。

???

「落ち着いたようじゃな」

春水

「はい」

???

「ではそなたの質問に答えよう。儂はそなたの住んでいた地球の神じゃ」

春水

「え、神様」

目の前の老人は自分は神様であると答えた

春水はそれを聞いて

(これは夢なのかな?) と思った。

神様

「春水よ、そう思うのも無理はないがこれは夢ではない。じゃが、その疑問に答えるのは

はある程度説明をしてからにしとくれ」

春水

「!!」

言葉にしていけない自分の心をあてられて、

春水は驚いたが

今は神様の説明を聞くことに集中する。

神様

「そしてこの場所は、儂ら神の住まう空間じゃ。何故お主がここにいるかじゃが、儂が寝ているお主をここに転送したのじゃ。」

この場所がどこなのか

そして

ここに誰が連れてきたのはわかった。

しかし何故自分が呼ばれたのか、

春水にはわからない

神様

「何故ここに転送されたのか、それはお主がごく稀にみる別の世界に転生できる因子を持った転生適合者じゃからじゃ。」

春水

「適合者？」

神様

「適合者とは、まあ無事に別の世界にいけるものたちと思ってもらってかまわん。」

春水

（それってつまり適合者じゃなかったら転送されたらいきなり死んだりするってこと？）

神様

「さよう。まあ今はそんなことはないのう」

昔は結構あったのかと春水思った。

それと同時に、

春水は別の世界に転生することがわかった

春水

「適合者についてはわかりました。じゃあ俺はいつたどこに転生させられるんですか？」

春水は自分がどんな世界に送られるかが気になり

神様にたずねる。だが、

たずねてすぐ神様顔つきが変わったのを見て、
あまりいいところではないのがわかる。

神様は春水に答える。

神様

「お主が転生するのは、お主の世界ではアニメ、漫画、Gameなどで知られておる」

神様

「M u v — l u vの世界じゃ」

春水

「え、M u v — l u vってあのB E T Aって地球外生命体に侵略されてる？」

神様は春水を見て頷く。

春水はアニメは何年か前に見たことはある

しかし、

あくまでアニメであつた世界

そこに自分が送られることにイマイチピンとこない

アニメの内容を忘れかけていたからだ。

神様

「お主をいきなりなんの準備もせず転生はせぬ。まずはその世界を実際に見てもらう」

春水

「見る?」

神様

「さよう。ここでは転生する時間軸は選べる。だからその世界でおきた過去の映像をお主に見せる。じゃが見るにあたり気をしっかりもつように」

春水

「何故?」

春水は M u v — l u v の世界を

B E T A と戦うぐらいにしか考えていない

そんなに深刻な状況だと理解していなかった。

神様

「見ればわかるかの、お主が無理だと判断したらすぐに映像を止める。では映像をながす」

あたりの景色が変わる

ここがどこかわからない

ただわかるのは自分が空から地上を見てる

地上に戦車が陣形をくんでいる

神様

「ここは地球で一番最初にBETAとの戦いがおきた中国のウイグル自治区じゃ」

春水は神様の話を聞きながら

地上の戦車に目を奪われている

今までの日常で戦車を実際に見ることがないからだ。

神様

「そして地球でおきた悲劇の始まりの地」

悲劇と聞いて春水は神様見る

神様

「あれを見よ。」

春水は神様が指を指したほうを見た

そこには塔のようなものが建っていた

春水

「あれはいつたい？」

神様

「あれはハイブ。BETAの地上における拠点じゃ」

春水

「拠点。じゃああれを破壊するのがここにある戦車の役目なんですか？」

神様

「いやちがう。本来はそのほうがよい」

春水

「ちがう？ 敵拠点を破壊しないのですか？」

神様

「実は中国はBETAを倒したのちハイブひいては地球外の技術を自国の物にしようとしたのじゃ。その為に国連軍からの援軍要請を断っておる」

春水

「なるほど」

中国が技術を独占しようとしている

自分がいた世界でも別の世界でも、

国のあり方は変わらない

春水はそう思った。

神様

「そろそろ始まるのう」

春水は地上の戦場に視線を戻した

BETAの拠点から異形の生物が続々と出てきた
小型から大型までどんどん出てくる。

その数は計り知れない

春水

「なんだこの数!! いったいどれだけいるってんだよ!」

神様

「1つのハイブで数十万はおる」

春水

「なっ!!」

あの拠点にはそんなにもBETAがいるとは、

春水は予想もしていなかった。

しかし、神様は更なる事実を告げる

神様

「あれでもまだ少ないほうじゃ。ハイブができてからまだ日が浅いからの」

春水は驚愕しかなかった

地上では戦車隊が砲撃を開始した。

砲撃によってBETAが撃破されていく

だが砲撃をものともしない個体がいた

春水は神様にあれがなにかたずねる。

春水

「あの戦車の砲撃をものともしないのはいったい？」

神様

「あれは突撃級またはデストロイヤー級とよばれておる。体の全面にある装甲はとても硬く戦車でも砲撃を撃ち込む角度によっては倒せるが、なかなか難しい」

突撃級

戦車の砲撃が効かない生物

倒す方法なんかあるのか？

春水はそう思った。

神様

「方法はある。ほれきたぞ」

春水の耳にある音が聞こえてきた

その音は瞬く間に大きくなり2人の前を通過した

春水

「戦闘機!!…って近!…ってあれ?あんなに近くを通過したのになんで耳とか大丈夫な

んだ？」

神様は呆れながら春水に告げる

神様

「流石に音や衝撃はやわらげるわい。じゃないと死んでしまうからの」
なるほどと思うのと同時に、

やわらげないと映像なのに死ぬことに
意味がわからなかった。

戦闘機が戦場を飛び回り

突撃級の背後から機銃、ミサイルを撃ち込んでいく。

同時に戦車も他のBETAを撃破していく。

徐々にではあるが戦線を軍隊が押し上げている

春水

「思っていたよりも軍隊のほうを押している。神様これのどこが悲劇なんですか？」
神様

「軍隊の攻勢はこれから数日後におわるのじゃ。すこし映像を飛ばすのう」
すぐに回りの映像が切り替わる

地上では軍隊がハイブの近くまで迫っていた。

空には戦闘機が飛び回りBETAを攻撃している

神様

「よく見ておくのじゃ。BETAに負けることがどうゆうことかを。」

春水が神様に

理由を聞こうとした矢先

彼の目の前で戦闘機が撃墜された。

春水

「えっ」

光が戦闘機を撃ち抜いた

それをきっかけに次々と戦闘機が撃墜されていく。

春水

「あの光はいつたい?」

神様

「あれは光線級またはレーザー級と呼ばれている。よく見なさい、体が小さいが顔に大きなレンズみたいなのがついているBETAがおるじゃろ」

春水は光の発生場所を見る。

確かに小型でレンズみたいなのがついたのがいるのを確認

神様

「あれの出現により制空権は失われた。制空権が無くなれば突撃級の進行を戦車では止められぬ。そして戦線がハイブに近いが為に撤退も容易ではなかったのじゃ」

空では戦闘機が撃墜され、

地上では戦車が蹂躪されていく。

1体の大型の腹から飛び出た触覚？みたいなので貫かれた

戦車は次の瞬間溶けていく

春水

「あの大型は？」

神様

「あれは要塞級またはフォート級と呼ぶ。体内に他のBETAをいれている母艦みたいなものじゃ。そして、あれは触覚ではなく触手であり、先端からは強酸性の溶解液がでてくる。」

離れた場所には

運よく突撃級の突撃から免れた戦車がいたが、

次の瞬間小型のBETAに取り付かれていく。

春水はその戦車から目が離せなかった

どうなるのかわからなかったから。

だが、知らなかったがゆえに春水は

おぞましい光景を見ることになる。

春水

「なっ、戦車が食べられていく。神様あの橙色のBETAはいつたい？」

神様

「あの小型は橙色が戦車級またはタンク級と呼ぶ。あれがこの世界の兵士の命を一番奪っているBETAじゃ。そして食べるのは兵器だけではないのじゃ」

春水

「!!」

神様の話しは途中から春水には聞こえていなかった

食べられていく戦車の中に戦車級が手を入れる。

戦車から抜いた手には兵士が握られていた。

兵士は泣き叫び助けを求めている。

しかし次の瞬間、

兵士は複数の戦車級によって食べられていく。

そしてそれは至るところでおきている

春水

「兵士が…食べら…れていく……………!? うっ……………おええええ」

春水はその光景に耐えられず嘔吐した。

地上では兵士が逃げ惑っている

しかし、逃げ切れない。

戦車級ではない小型の白いBETAが

次々と兵士を捕獲しては食べていく

手足を千切られる兵士

頭を食われる兵士

あたりには血溜まりが出来ていく。

食い残された腕、頭、内臓

悲鳴をあげる兵士達

血の匂いがあたりを満たしていく

この戦場はまさに

地獄と呼べる場所が変わっていた。

神様

「……………映像停止じゃ」

地獄の光景から

空は綺麗な青空に変わりあたりは草原に変わる

しかし春水の耳には兵士の悲痛な叫びが、

脳裏には兵士の食べられる姿がハッキリと焼き付いている

神様

「少し休みなさい」

神様は春水に手をかざす

春水の意識はそのまま沈んでいった。

神様

「遅かれ早かれ知らなければならん運命じゃったが、やはり平和な世界で生きてきた春水にキツイ現実じゃったかの。しかし、乗り越えてもらわねばならぬ。あの世界を救うためにものう」

神様は遠くを見ながら呟くのであった。

2話

はあ……はあ……はあ……

あたりは暗闇であしもとすら見えない。

それでも春水は逃げるようにひたすら走る。

はあ……はあ……はあ……

春水の周りから

BETAに襲われているたくさんの兵士の泣き叫ぶ声が、

助けを求める声が、食べられ苦しむ声が聞こえる。

はあ……はあ……はあ……

春水

「なんで……はあ……はあ……どうして……はあ……はあ……こんな……こんな……死に方はあんまりだ……人が食べられるなんて」

春水は涙が止まらない。

平和な日常で生き、歳をとって老人になって家族に見守られながら死んでいく。

それが当たり前だと思っていた。

でも、あの世界は違った。

人が食べられていく

見たのは戦場だった。

しかし、もしあれが都市だったら

そこには兵士だけじゃない

そこで暮らす人々がいる。

大人だけじゃない。

小さな子供、老人、妊婦、動けない病人や怪我人、

どれだけの犠牲がでるか想像もつかない。

そんな世界に転生する

楽観視していた。無知であるがゆえに

しかし今は違う

春水の心は恐怖にぬりつぶされている

震えが止まらず逃げたくて逃げたくてしようがない。

死ねのは怖いが、

それ以上に自分も奴等に食べられて殺される

そんな光景が容易に想像できとしまうから。

春水

「死にたくない…、死にたくない…」

理不尽に殺されるねは嫌だ。

戦車や戦闘機すらかなわないそんな世界だけれど

春水

「生きたい。怖いけど…死にたくないから…理不尽で残酷な世界に…抗う力がほしい。」

恐怖心に抗いながら

転生する世界で生きていくために戦うことを

春水は決意する。

決意した直後、暗闇の世界に一筋の光が差し込む

春水は光にむかって走り出した。

神様は春水の心を見ながら起きるのを待っていた。

春水が恐怖に抗いながら

戦う意思を持つてくれたことを喜ぶ一方、

やはり平和に暮らしていた春水を死地に送るのだから、

後悔はしている。

神様

「そろそろ起きるかの」

春水はゆつくり目を開けた

神様

「大丈夫か。気分はどうじゃ？」

春水

「なんとか。…大丈夫かといったら大丈夫じゃないですけど」

春水は神様の目を見ながら答える。

春水

「俺は戦います。正直怖いです。けど、死にたくない、食べられるのはもつと嫌だから。」

神様

「そうか。…：ならお主が生きるため抗うために儂から恩恵を授けよう。もつとも最初から授けるつもりじゃったがのう。」

神様は春水に近づく

神様

「春水よ。移動するから儂に触れなさい。」

春水

「はい。」

春水は神様の肩に手を置く

神様は手が触れたのを確認し転移した。

神様

「着いたぞ。といつても一瞬じゃがなの。」

春水

「()は？どこかの基地のようですが。」

春水は辺りを見回す。

目にはいるのは大型モニターに多種多様な計器類

モニターにはこの基地の全体図が映し出されていた。

春水は全体図をみてここがどこだかわかった。

春水

「()はまさか……………小惑星アクシズ!!」

神様

「そうじゃ。さて内部の説明の前にお主に紹介せんとな」

神様はモニターを見ながら名を呼ぶ

神様

「アプロディアよ。姿を見せなさい」

春水

「!!」

春水は神様がその名を呼ぶのを聞いて驚く。

アプロディア

「お呼びでしょうか……神様」

春水はモニターを見ていた。

そこに映ると思っていたから、

しかし、アプロディアはモニターに映るのではなく

立体映像で神様と春水の前に現れた。

神様

「さてアプロディアよ。ここにいる霧島春水がそなたの仕えるマスターじゃ。」

アプロディア

「了解いたしました。」

神様

「ではアプロディアよ、春水にこの基地の説明を頼む」

アプロディア

「はい。ではマスター説明を開始してもよろしいですか？」

春水

「あ、はい」

春水は何とか一言返した。

それが精一杯だった

何故なら目の前にアプロディアがいる

大好きな Game のキャラクターがいるのだ。

放心状態になっても致し方ないだろう。

しかし、

説明を聞き逃すわけにはいかないから

春水はアプロディアの話を聞く為、姿勢を正す。

アプロディア

「ここは先程マスターが言われた通り小惑星アクセスです。内部は居住区、兵器開発区、兵器格納区、食料生産区、食料保管庫、軍港となっております。」

アプロディアの説明と同時にモニターに

各エリアの映像が映し出される

アプロディア

「居住区の収容人数は決まっております。拡張は可能です。兵器開発区ではMS、戦

艦などの開発、改造が可能で1度に生産できるMSは10機まで、戦艦は1艦製造できます。格納区は拡張可能で今はMS500機、戦艦40艦が格納できます。」

春水

「食料生産区、食料保管庫、軍港は？」

アプロディア

「食料生産区は今現在稼働しておりませんが、稼働すれば1週間で5万人分作られます。なお生産量は任意で変更可能です。食料保管庫は今現在マスターが1年過ごせる分だけあります。軍港は2ヶ所あり現状20艦ずつでこちらも拡張可能です。」

アクシズの施設の説明を聞き、

改めてすごいと春水は思った。

神様

「さて春水よ。すぐ転生するかの？それとも…」

神様に言われて春水はすぐに答える

春水

「いえしばらくここでMSの操縦技術を学ばせてください。」

神様

「わかった。ただし1年だけじゃぞ」

神様は春水がそうゆうとあらかじめわかっていたのか、笑いながら答えた。
神様

「あとここに作ったMS、戦艦は転生するときに全部は持っていけないから気を付けるようにの。」

春水

「はい。わかりました」

春水は神様に頭を下げた。

神様

「では、1年後にまた来るのじゃ」

素晴らしい残し神様は消えた。

神様がいなくなり

春水は先ずMS、戦艦の生産をすることにし、

アプロディアに話しかけた。

春水

「アプロディア、MSと戦艦は今から生産したらどれくらいでできる？」

アプロディア

「転生前ですので、明日には可能です。」

春水

「……え」

まさか1日でできるとは思わず

春水は驚いた。

アプロディア

「マスター。何を生産いたしますか？あと生産前に生産する機体の改造をしますか？」

春水

「……………あ、ああ。」

春水は生産する機体、戦艦は既に決めている。

Gameで1番好きな機体を、それを運用に最適な戦艦

春水

「アプロディア。MSはCB-002……ラファエルガンダムを。戦艦はプトレマイオ

ス2を頼む」

アプロディア

「わかりました。どのように改造いたしますか？」

春水

「プトレマイオス2は機体搭載量を10機にしておいてほしい。」

アプロディア

「はい。MSのほうはいかがなさいますか？」

春水

「ラファエルはセラヴィーIIへの変形、分離は排除。ただし、GNクローは分離可能のままで。動力は3基の疑似GNドライブを全てオリジナルGNドライブに。セラヴィーのGNバズーカはガンダムF91のヴェスパーみたいに機体の腰部部分に稼働できるようにしてほしい。それと、腰部部分にGNビームサーベルを1本。あとコックピットをZガンダムで使われていた全天周囲モニターにしてほしい。」

アプロディア

「承知いたしました。」

春水は内心

(以外に無茶な改造が出来るもんだな)と思った。

ラファエルにしたのは好きだからでもあるが

正直BETAに近付きたくないし、

あの大群を一撃で沢山倒すためである。

1人で戦うことがあると予想されるから、

動力を半永久に変えた。

セラビイーへの変形、分離を無くしたのは、

ただ単に武装が減るし、脳量子波か使えないから。

いつか使えるかもしれない可能性がありかもしれないが、いまはいらない。

春水

「そうだ、アプロディア、機体が無いなら操縦技術は明日からになるのか？」

春水は疑問をアプロディアに聞いてみる。

アプロディア

「いえ、今仰られた機体のデータをインストールしたシミュレーターを御使いいただきます。今から訓練を開始しますか？またパイロットスーツはいかがなさいますか？」

機体の操縦訓練は出来るのがわかった。

なら早く訓練をしたほうがいいだろう。

春水

「ああ。今から訓練をするよ。スーツは、ガンダム〇〇のアロウズのイノベイドが使っていたタイプを。あ、ヘルメットはバイザー回りを白色で頼む」

アプロディア

「かしこまりました。では案内いたします。」

案内されながら考える

たった1年

1年後にはあの世界に転生する。

生きるために強くならなければならない。

春水

「俺は必ず生きる、そして必ず強くなる……1年がんばってみせる」

どんなに訓練が辛くても、挫けそうになろうと、

やり遂げることを心に誓うのだった。

3話

春水のもとから離れ元の空間に戻った神様は
訓練の様子を時間軸をいじりながら見ていた。

最初の1ヶ月は

シミュレーターを使い地上のみの訓練であったが、

機体をうまく扱えず転倒したり、

射撃訓練で的に当たらなかったり、

四苦八苦しているのをまるで孫を見ている祖父のように

微笑ましく見ていた。

3ヶ月

実機での訓練も開始

ぎこちないが機体の制御に慣れ初め、

射撃的に3割近く当たるようにもなっている。

このときから宇宙空間での基礎訓練を開始

回避訓練も同時に始めていた。

地上の回避訓練はある程度よかったが、空中、宇宙では、

四方八方から、ビームが飛び交う中

2、3回避けたが機体を撃ち抜かれてしまっていた。

6ヶ月

地上での基本動作は完璧になり訓練が終了。

空中、宇宙はまだ訓練を続けていく。

射撃訓練も8割ほどの破壊できるようになり、

回避技術も上達しており、訓練の難易度をあげていた。

またBETAとの戦い方を各種類ごとに勉強

その後1万体のBETAとの戦闘訓練を開始。

バックパックの両側にあるGNクローがBETAに向けられ、

砲口に粒子が収束していく。

次の瞬間、粒子が放出されビームとなり

瞬く間にBETAを殲滅していった。

10ヶ月〜12ヶ月

この頃にはBETAとの戦闘訓練をひたすら続けていた。

BETAの数は既に20万をこえていたが、全射撃武装を使つて殲滅していた。

数が多い為、BETAに接近される場面もあった。ある程度距離がある内に空中に回避していったが、直ぐに回避行動をとりはじめている。

先程まで機体があつた場所を

複数のレーザーが通過していった。

回避後直ぐに反撃を春水が開始していた。

神様

「すごいと思う。」

神様は春水が短い期間で

ここまで操縦技術を高めて

強くなつていることに驚愕したのと同時に、

BETAへの恐怖を乗り越え

過酷な訓練をこなした春水の努力を称賛した。

神様

「さて、そろそろ行くかの」

神様は春水のいる場所に転移した。

春水

「やつと1年か」

春水はラファエルガンダムを見ながら感慨深く呟いた。今では自分の手足のように動かせるようにはなつたが、最初は酷かったことを思いだし苦笑する。

1年たち神様がくれれば

とうとうあの世界に行くことになる。

シミュレーターのBETAは正直本物ではないからなんとかあったが、あの世界では違うだろう。

人の生き死にかかった戦場なのだから。

春水が改めて覚悟を決めていると、

後ろに気配を感じ振り向いた。

振り向いた先に神様が立っていた。

神様

「久しぶりじやな春水よ。」

春水

「お久しぶりです神様。」

神様は春水の顔を正面から見て、1年たって顔付きが変わったことに気づいた。同時に、訓練し自信がついてはいるが、不安も感じている表情をしていた。

神様

「まだ不安かの？春水」

春水

「はいすこしだけ。けどやれることはやりました。だから大丈夫です。」

神様

「そうか……。ではこれからお主を向こうの世界に転生させる。」

春水

「はい。」

神様は手をお前にかざした。手先が光に包まれる。

神様

「時間軸は1997年4月。アクシズ的位置は地球と月の間じや。ではゆくぞ、春水よ。」

春水

「はい。いままで御世話になりました。」

春水は神様に頭を下げた。

次の瞬間アクシズは光に包まれ神様を残し姿を消した。

神様

「頑張るのじゃぞ、春水よ。」

1997年4月

宇宙空間小惑星アクシズ内部

光が収まった後、春水はアプロディアに話しかけた。

春水

「アプロディア。転生は終わったんだよな？」

アプロディア

「はい。無事完了しております。」

春水

「そうか。」

春水はこれからまずどうするか考える。

BETAとの戦うのにずっと1人は流石に辛い

とりあえず地球に向かい、日本に行くことにした。

春水

「よしアプロディアまずは地球に行こう。トレミーの発進準備を頼む。」

アプロディア

「了解いたしました。機体は何を持っていきますか？」

春水

「ラファエルガンダムが1、量産型バウを9で頼む。」

アプロディア

「了解いたしました。あとマスター、食料生産並びに生産した食料の保存を開始します。」

春水

「ああ頼む。」

アプロディアは直ぐに各ブロックで行動を開始した。

春水は軍港に向かう前に自室に向かった。

自分の軍服に着替える。

春水の服装はミスターブシドーの仮面なしで羽織は白
ジオン軍の軍服と迷ったがこちらにした。

着替えが終わり、軍港に向かった。

軍港に着いたときにはMSの搬入は終わり発進準備が完了していた。

春水はトレミーに乗り込み艦橋に入り館長に座った。

そして春水はアプロディアに発進するよう指示をだした。

春水

「アプロディア。トレミーを地球の日本に向けて発進だ。」

アプロディア

「トレミー発進いたします。」

アクシズの軍港からトレミーが地球に向けて移動開始

春水はアプロディアに話しかける。

春水

「アプロディア、日本にはどれくらいでつける?」

アプロディア

「1日です。アクシズは少し地球よりに転移しておりましたので。」

春水は1日と聞いて日本に着くまで訓練をしようと決め、

アプロディアに伝えようとしたが、先にアプロディアが話しかけてきた。

アプロディア

「マスター、神様から日本に向かったらこの方に会うようにと仰せつかっております。」

アプロディアはモニターに1人の日本人女性を映した。

春水

「いったい誰なんだ？この綺麗な人は？」

アプロディア

「この方は日本帝国五撰家崇宰家名を崇宰 恭子（たかつかさ きょうこ）と申します」

春水

「日本帝国？五撰家？」

春水は知らない単語が出てきて混乱していた。自分のいた日本と同じと思っていたがどうやら違うらしい。

アプロディア

「はい。マスターのいた日本とこの世界の日本は全く別物です。マスターのいた日本は戦争に負け帝国が滅びましたが、この世界の日本は戦争に負けておりません。BETAによって国同士で戦うのを中断したためです。」

春水

「そうなのか。じゃあ五撰家とは？」

アプロディア

「五撰家とは武家のトップである政威大將軍を輩出する有力な力を持った5つの武家のことです。」

春水

「え、じゃあこの人凄く偉い人なの？」

春水はモニターに映った恭子を指差した。

アプロディア

「はい。」

アプロディアは頷いた。

春水はモニターの恭子を見ながらそんなに偉い人が、

神様に言われたが見ず知らずの自分に会ってくれるわけないと思っていた。

アプロディア

「大丈夫ですよ。神様が既に御告げとして夢に介入したそうですから。これが連絡先になります。明日の夕方には日本の京都に着きますので先方に連絡をお願いします」

アプロディアはモニターに連絡先を表示

春水に連絡するよう促す。

春水

「わかったよ。」

恭子 side

(昨日の夢はいつたいたいなんだったのでしょうか？神様と名乗るお爺さんがいきなり霧島春水に助力してほしい、それがこの世界の為になると言われた。正直夢にしては何かが変わりました。しかし、それを真に受けるわけにはいきません。今はどうやってBETAから日本を守るか考えねばならないのですから。)

部下の訓練内容、戦術の確認、民の避難経路の作成

恭子にはやることがたくさんあった。

大陸の戦況が正直芳しくない聞いている為、

いつ日本にBETAが進行してくるか解らない状況下であり

夢ではなく現実をみないといけない。

そう恭子は思った。

しばらく作業をしてから恭子は休憩に入り窓から京の都を見る。

この窓から見える景色が恭子は好きだった。

四季折々の風景が、そこに生きる人々が。

この平和な景色を守りたい

恭子は改めて決意する。

しばらく恭子が景色を見ていると部屋の電話が鳴った。

部下からの連絡だと思い、受話器をとった。

恭子

「もしもし」

春水 side

恭子

「もしもし」

春水

「も、もしもし。突然の連絡申し訳ありません。そちらは崇宰恭子さんであっています

でしょうか？」

恭子

「……私が崇宰恭子ですが……貴方はいったい何方ですか？」

春水は恭子本人がでると正直思っていなかった為、内心ビツクリしていた。しかし、神様が頼るように入った人物であるから用件を伝える。

春水

「自分は霧島春水と申します。神様からあなたに連絡らしきものがあつたとおもいますが？」

恭子 side

春水

「も、もしもし。突然の連絡申し訳ありません。そちらは崇宰恭子さんであつていますでしょうか？」

恭子は聞いたことのない声に最初は名を名乗るか迷つたが、相手の名を聞くために名乗ることにした。

恭子

「……私が崇宰恭子ですが……貴方はいったい何方ですか？」

相手の息を飲む音が聞こえた。が次の瞬間驚愕することになる。

春水

「自分は霧島春水と申します。神様からあなたに連絡らしきものがあつたとおもいますが？」

恭子

「え、霧島春水……」

恭子は夢で聞いた名前の相手から電話がかかってくるとは思わなかった。同時に、あれは夢じゃないとゆうことに気がついた。神様が助力するように言われた人物。ならば、

この人物の協力が得られれば日本を守れるかも知れないとそう思った。

春水 side

恭子

「え、霧島春水……」

相手が息を飲む音が聞こえる。どうやら神様から連絡はあったらしい。春水は恭子に助力してくれるように頼む。

春水

「えっと、自分は今宇宙にいて明日の夕方には京都に着きます。それでですね、出来れば日本の軍人さんに一緒に BETA と戦ってほしいのですが？ 助力してもらえますのでしたら自分も日本に協力しますしこちらの一部の機動兵器の設計図と技術を提供しますかどうかでしょうか？」

恭子 side

助力すれば相手の協力が得られさらに未知の兵器の設計図に技術が手にはいる。

それがどういったものかはわからない。

恭子は聞くことにした。

恭子

「その兵器は戦車や戦闘機ですか？もしそうなら申し訳ありませんがそれはBETAには有効ではありません。それとも戦闘機のようなものですか？」

春水 side

春水

「戦闘機？つてなに？」

春水はまた聞いたことのない単語を聞き、アプロディアにどういったものか聞いた。

アプロディア

「戦闘機とは人類がBETAと戦うために作った人の形をした兵器です。MSみたいなものですが性能はあまり高くはありません。」

春水

「成る程。」

春水は恭子に答える。

春水

「戦車や戦闘機ではありません。人の形をした兵器ですよ。そちらにパソコンはありませんか？データを送りたいのですが？」

恭子 s i d e

恭子

「パソコンならあります。アドレスを送ります」

人の形をした兵器と聞いて B E T A と戦うのに役立つかも知れないと恭子はおもった。性能はわからないがそれはデータを見れば少しはわかるかもしれない。

送られてくるデータを恭子は待った。

春水 s i d e

春水

「じゃあ送ります。」

春水は量産型バウのデータを送った。

トレミーに積んだバウは元々日本に提供する予定だったからデータを送っても問題ない。

春水は恭子の返事を待った。

恭子 s i d e

恭子

「きた。……な……なにこれ……」

恭子は驚愕した。送られてきたデータの機体のスペックが戦術機とは比べられない

ほど性能が上だった。

さらに驚いたのはその武器だ。

実弾ではなく、まだこの国も開発できていない光学兵器

だった。

恭子はこれがあればBETAに勝てるかもしれないと思い、

必ず春水の助力を得なければと思った。

恭子

「……霧島さん。私は貴方に助力いたします。ですが、日本の軍人すべての協力は私には決められません。貴方には殿下にあつてもらわなければなりません。」

春水 side

春水

「殿下ですか……わかりました。明日京都に着きましたらまたご連絡いたします。その時に殿下に会うときの話をしましょう。ではまた明日、失礼します。」

日本帝国トップに会わないといけない。

春水は正直緊張するし、礼儀作法なんかわからないから相手に迷惑かけないか心配だった。

恭子 side

恭子

「…………ふう」

個人の協力は得られたあとは殿下に認めてもらえるか、

恭子は日本帝国の為、必ず成功させると誓った。

パソコンのデータをもう一度確認したあと

恭子は電話をかけた。

恭子

「……………東京にいる巖谷中佐を大至急ここに呼んでください。」

電話を終了し、窓の外を見る。

景色を見ながら明日霧島春水に会うのが

少し楽しみな自分がいるのに苦笑し

恭子

「明日が待ち遠しいのは久し振りですね。」

恭子は大空を見つめるのであった。

4話

1日後

地球圏大気圏突入前プロトレマイオス2内部

春水

「やっぱりでかいよな……………地球」

春水は宇宙から見る地球の大きさに感慨深く呟く。

生きてるなかで宇宙から地球を見ることなどないと思っていたのだからしょうがないだろう。

アプロディア

「マスター、これより大気圏に突入いたします。衝撃に備えてください。」

アプロディアは春水に地球に突入することを告げる。

春水

「わかった。アプロディア大気圏突入後トレミーに光学迷彩後GN粒子散布を頼む。」

アプロディア

「了解いたしました。では突入します。」

トレミーは大気圏突入を開始した。

恭子 side

日本時間正午京都

恭子

「お待ちしていました。巖谷中佐」

恭子の屋敷に1人の男性士官が訪ねてきた。

巖谷 榮二（いわや えいじ）

日本帝国陸軍技術研第壹開発局副部長を勤めている。

巖谷

「急な御呼びだしかがなさいましたか崇宰様。」

巖谷は呼び出された理由が分からず恭子に問う。

恭子は巖谷中佐に昨日起こったこと、ならびに

呼び出した理由を説明する前にデータを見せることにした。

恭子

「理由を説明する前に先ずはこれをご覧ください。」

恭子は巖谷中佐にパソコン画面を向けた。

そこには京都春水から送られてきたバウのデータが映し出されていた。

巖谷は画面をしばらく見たあと驚愕した。

巖谷

「こ、これはいつたい」

恭子は驚くのも無理はないと思った。昨日自身もそうだったのだから。

恭子

「御呼びした理由はこれです。これは昨日ある人物から送られてきました。」

巖谷

「その者とはいったい……それにこれほどの兵器のデータを送ってくる理由もわからないし、なんのメリットもなくこんなことをするのはおもえん。」

恭子の元にデータが送られてきた。

巖谷はその理由が分からず思案するが、恭子が巖谷に理由を説明する。

恭子

「その人の名は霧島春水と言います。日本帝国にBETAとの戦闘に対して協力関係を求めてきました。協力してもらえらるなら一部兵器の設計図並びに技術提供をしてくれるそうです。そしてこのデータがあるということはどういことかわかりますね。」

巖谷

「崇宰様はその者に協力なさるとゆうことですね。」

データがあるとゆうことは恭子が協力することを受諾したことだと巖谷は理解した。しかし、恭子が受諾しても日本帝国が協力したことにはならないこともわかっていたため恭子に問う。

巖谷

「しかしいくら崇宰様が協力をするとしても殿下の許可がなければ協力できないのでは？」

恭子

「わかっております。ですから霧島殿を殿下に会わせるつもりです。そして、日本帝国の為になると殿下を説き伏せてみせます。」

巖谷は恭子の発言を聞いて決意が固いことを理解した。

そして自分が呼ばれた理由を確信した。

巖谷

「崇宰様。私を御呼びした理由はこの兵器の開発するためですね。」

恭子

「そうですが、もうひとつ用件があります。」

巖谷

「もうひとつの用件？」

恭子

「はい。今日の夕方に霧島殿に会います。その時に巖谷中佐にも同席してほしいのです。」

巖谷

「夕方ですか……」

巖谷が少し困った顔をしていることに恭子は気づいた。

恭子

「なにか都合が悪いのですか？」

巖谷

「急な御呼びだしでしたから明日には東京に戻らなければなりませんので、個人的な用で箕家へ夕方に行こうと思っておりましたもので。」

恭子は巖谷の話聞いて思案したあと巖谷に答える。

恭子

「箕家ですか……ならそこで会談しましょう。私も久しぶりに唯衣に会いたいですし。」

巖谷は恭子の発言に戸惑った。

巖谷

「本当によろしいのですか？」

恭子

「問題ありません。では夕方霧島殿が来たら篁家に参りましょう。では巖谷中佐、このデータをお持ちください」

恭子はバウのデータを巖谷に渡した。

春水 side

大気圏突入後直ぐに光学迷彩を起動したトレミーで京都に向かう。そんななか春水はふとした疑問を感じアプロディアに話しかける。

春水

「アプロディア、今崇宰さんに会うために京都に向かっているじゃないか。」

アプロディア

「はい。」

春水

「このまま行ったらトレミーどこに止めればいいんだ？」

そう、春水はこの時プロトレマイオス2を停泊させる場所を全く考えていなかった。そんな春水にアプロディアは答える。

アプロディア

「光学迷彩をしたまま崇宰邸まで行き、マスターには小型艇で降りてもらいます。その

「後本艦は1度海まで戻り潜航します。」

春水

「小型艇なんかあったのか、知らなかったよ。しかし、バウのデータは渡したけどサンプルとしてバウを1体渡すつもりだったんだけど。」

アプロディア

「その時は何処かの基地を指定してくださいれば無人でむかわせます。」

春水

「そうだな。じゃあ渡す場所決まったら連絡する。」

アプロディア

「わかりました、連絡御待ちしております。∴マスターそろそろ目的地上空に到着いたしますので、小型艇へ向かってください。なお、崇宰様への連絡をお忘れなく。」

春水

「あいよ。じゃあ行ってくる。」

春水は小型艇へ向かう。

小型艇に着き、恭子へ連絡をいれたあとトレミーから

飛び立った。

恭子 side

仕事をしながら春水からの連絡を待つ。

部屋には恭子以外に巖谷がパソコンを借りてバウのデータを見て思案していた。

恭子がそろそろかと思ひ、机から顔を上げたと同時に電話がなった。

巖谷も気がついたのだろう、パソコン画面から視線を恭子にむけている。

恭子は巖谷に頷いてから電話にでた。

恭子

「もしもし」

春水

「もしもし、霧島です。」

恭子は相手が春水であることを確認し巖谷に合図し、話を続ける。

恭子

「霧島さん連絡を御待ちしておりました。今どちらに？」

春水

「崇宰邸の上空です。今からそちらへ小型艇で向かいます。」

恭子

「……………え……………」

恭子は春水が家の上空にいて今からおりてくると言われ、

理解するのが遅れ言葉に詰まる。

巖谷は恭子の様子を見て、どうしたのだろうかと心配していた。

春水

「では後程」

恭子

「……………あ、はい。」

電話が切れてから恭子は少し放心していたが、春水が来ると理解すぐに玄関へ向かった。

巖谷は放心していた恭子がいきなり立ち上がり部屋から出た為、状況がわからないが恭子のあとを追った。

春水 side

崇宰邸を見ながら空いてる場所を探す。

たくさんの車が止まり、軍服を着た人たちが此方を見て、慌ただしく動いている。

駐車場が空いてはいたが小型艇で降りていいのかわからなかったが、そこしかないため着陸を開始した。

着陸中に玄関から1人の女性が出てくる。

すぐにその後ろを1人の男性が追いかけるように出てきた。

女性の方はすぐに恭子だとわかったが、男性の方は全くわからなかった。だが、ここにいるとゆうことは恭子に呼ばれたのだろうと思ひ、其なりに偉い人なんだろうと決めた。

春水

「よし着いた。この小型艇すごいな、着陸するさいに全く揺れないし衝撃も感じなかった。」

地上に着き春水は小型艇から降りて、此方を見ている2人の元に向かい話しかける。

春水

「初めまして、俺は霧島春水といいます。貴女が崇宰恭子さんですか？」

春水は名を名のり相手が恭子本人か確認する。

恭子

「そうです。私が崇宰恭子です。初めまして霧島さん。私の後ろにいらつしやるのは日本帝国陸軍所属の巖谷榮二中佐です。中佐は開発局に勤めておりますのでこの度同席してもらえるようたのんだのです。」

春水は巖谷を見る。

巖谷も春水を見て自己紹介をする。

巖谷

「初めまして霧島殿。私は巖谷榮二、日本帝国陸軍で戦術機などの開発をおこなっている。技術研第壹開発局で副部長を勤めている。以後よろしく。」

春水

「こちらこそよろしくお願いいたします。あと自分は軍人でもありませんし、年下なのであの呼び捨てでかまいません。」

春水は巖谷にそう答える。

巖谷は春水の言葉を聞き笑いながら

巖谷

「わかったと言いたいが、あれほどの兵器のデータを送った君を流石に呼び捨てにするのもどうかと思うから君のことはこれから霧島君と呼ぶことにするさ」

お互いに自己紹介が終わり少し雑談していると

恭子

「中佐そろそろいいですか?」

巖谷

「おっと申し訳ない。つい話し込んでしまった。」

恭子に促され巖谷は春水との話をやめ一歩さがる。

恭子は春水に話しかける。

恭子

「霧島さん、申し訳ないですが会談場所を移動してもよろしいですか？」

春水

「構いませんが移動する理由を聞いても？」

恭子

「はい。こちらの巖谷中佐が明日東京に戻られるのですが、私が会談に同席を頼んだ為此こちらでの用件をすませる時間がなくなりそうなのです。ですから中佐の用件をすませると同時にその場所で会談したいのです。」

春水

「理由はわかりました。移動するのは別に構わないのですが、あれはどうします？」

春水は小型艇を指差した。

流石に小型艇を置きっぱなしにするのは不味いかなと思ひ、場合によってはアップロディアに頼もうか考えた。

恭子

「置いておいて問題ありません。家のものたちに不審な者が近づかないよう監視させますから。」

そう言い恭子は近くにいた人達に指示を出し始めた。

それを見ていた春水はもしもの時はアプロディアに指示を出せばなんとかなるかな
と思ひ小型艇は恭子にまかせることにした。

恭子

「では巖谷中佐、霧島さん、いきましようか。」

近くの車に恭子、巖谷、春水は乗り込んだ。

車が走り出し春水はこの世界の京都の風景をみていて、

自分がいた世界との違いを見比べていた。

暫くして目的地に着いたのか車が減速し始める。

停車し車から3人が降りる。

着いた先は立派な門構えのある武家屋敷だった。

巖谷が玄関に向かい声をかけているのを見ながら、

春水は表札の名前を見てなんと読むのか考えていたが分からず恭子に聞く。

春水

「表札の名字はなんと読むんですか？」

恭子

「簞（たかむら）と読みます。」

恭子に教えてもらってる間に

巖谷は侍女が連れてきた女性と話をはじめた。

恭子

「あの人はこの家の奥方である篁 梅納（たかむら せんな）さん。主人である篁 祐唯（たかむら まさただ）さんは今は東京で軍務についておられます」

春水

「確か巖谷中佐も東京で軍務についていましたよね。じゃあ巖谷中佐は当主から伝言を頼まれていたってことですか。」

恭子

「多分そうなのでしょう」

巖谷と梅納が話をはじめてから暫くして

「あ、やっぱり叔父様。と、失礼しました巖谷中佐殿」

春水は声のする方を見ると、そこには敬礼をしている一人の少女がいた。

春水

「あの子は？」

恭子

「篁 唯衣（たかむら ゆい）。篁家の一人娘で今は衛士養成学校に通っています。」

春水

「衛士とは？」

恭子

「衛士とは戦術機のパイロットのことです。養成学校卒業後は帝国陸軍に所属し、戦術機に乗ってBETAと戦います。」

春水

「あんな少女まで戦場に……………」

中学生くらいの子がBETAと戦うために訓練している。

この世界の現状はわかっているつもりだったが実際に目の当たりするとやるせない気持ちになる。

巖谷と唯衣が和やかに話をしている所へ

恭子に促され春水は向かう。

唯衣は歩いてくる恭子に気づいたのか驚いていた。

恭子

「お久しぶりね唯衣ちゃん。随分大きくなって」

唯衣

「お、お久しぶりです恭子様。」

巖谷は驚いている唯衣を笑ってみていたが、

梅納に部屋を1部屋貸してもらおうよう頼む。

梅納は頷き唯衣に案内するよう伝え、

家の中へ戻っていった。

唯衣は巖谷、恭子、春水を部屋に案内した。

当初巖谷、恭子の2人だけだとおもっていたが、

恭子が春水に声をかけ一緒に歩いてくるのを見て

自分の知らない帝国の軍人さんかな?と思う。

部屋に入り巖谷、恭子が座りテーブルをはさんで

春水も座った。唯衣はお茶をだしたあと部屋の隅に移動した。

恭子

「では会談を始めるにあたりあらためて自己紹介を。私は崇宰恭子、帝国斯衛軍所属の衛士。階級は大尉です。」

巖谷

「では私も。巖谷榮二、階級は中佐で日本帝国陸軍技術研第壹開発局副部長を勤めている。」

春水

「俺は霧島春水、軍属ではなく一般人です。」

唯衣は春水が一般人であると聞き驚いた。

一般人が五摂家の恭子、開発局所属の巖谷と会談するだけでも異例なのに春水はそんな2人に連れられて来た。

唯衣が驚くのもしょうがないことだろう。

恭子

「では本題にはいりません。霧島さん、貴方はBETAと戦うため帝国に助力を頼みに来ました。そして助力の見返りに兵器のデータ並びに技術の提供を提案してきましたね」

春水

「はい。それであっています。」

恭子

「助力に関しては電話で話したとおり1度殿下に会ってもらわなくてはなりません、崇宰家は貴方に助力いたします。」

恭子は春水に頭を下げる。

春水

「ごちそうさまでありがとうございます。」

春水も恭子に頭を下げる。

巖谷

「霧島君ひとついいかな。」

春水

「はい。」

巖谷

「君はさつき一般人だと言ったが、それだとあの兵器のデータは何処で手にいれたんだい？それに技術の提供と言ったが……」

春水

「それを話すにあたり俺のことを話す必要がありますね。長くなりますが構いませんか？」

巖谷が頷いたのを見て、春水は自分がこの世界に来るまでのことを話した。

巖谷

「神によつて転生された別の世界の人間……にわかには信じられませんが、あの兵器は今の世界の技術じゃ作れない。ならばそれは本当なのだろう。」

巖谷は春水の言葉を信用した。

春水

「中佐殿、パウのデータを崇宰さんから渡されたと思いますが」

巖谷

「ああ確かに渡されたよ。」

春水

「日本がバウを作るにあたりサンプルとして1機送りたいのですが、何処に送ればいいですか？」

巖谷は春水の提案にとびついた。

巖谷

「!!……既に機体があるのかい!……それがあれば開発は早くなる。ただ場所は……直ぐには決められない。」

春水

「では後日にでも連絡をくだされば送ります。」

春水は巖谷に連絡先を渡す。

巖谷はポケットに連絡先をいれる。

それを見て恭子は春水に話しかける。

恭子

「霧島さん、殿下への会談は日程が決まり次第連絡いたします。」

春水

「よろしくお願いいたします。」

会談はつつがなく終わった。

春水は崇宰邸に帰ったら

トレミーに帰還するためアプロディアに連絡しないと、
考えていると恭子が話しかけてきた。

恭子

「霧島さんは会談までの期間どうなさるのですか？」

春水

「まだ決めてませんがとりあえず明日から訓練でもしますよ。」

恭子

「そうですね。その訓練に私が参加しても宜しいですか？」

春水

「え………まあ構いませんが、戦術機はありませんよ？あるのは俺の機体とバウだけですから」

恭子

「それで構いませので」

春水は思案する。

トレミーが見られるのは日本に助力を求めているのだから構わない。

正直恭子がバウをいきなり操縦出来るとは思わないが、他の衛士の目安にはなるだろうと結論づける。

春水

「わかりました、参加しても構いません。」

恭子はその言葉を聞いて頷いた。

すると部屋の隅にいた唯衣が春水に話しかける。

唯衣

「わ、私も訓練に参加させてください。」

春水と恭子は唯衣の言葉を聞き顔を見合わせる。

巖谷も唯衣を見ていた。

春水

「理由を聞いても?」

唯衣

「わ、私はまだ任官もしていない訓練兵ですが、日本を守る為強くなりたいのです。」

春水は唯衣の目を見るとその目は決意に満ちていた。

春水は巖谷、恭子見ると2人も頷いていた。

春水

「わかった。訓練に参加してもかまわない。」

唯衣

「ありがとうございます。……あの友人を呼んでもいいでしょうか？」

春水は苦笑しながら許可をだした。

3人は篁邸を出る。

巖谷はそのまま東京に帰るため2人に別れ告げを護衛の人達とともに別の車で去っていった。

春水は恭子と共に車に乗り崇宰邸へ帰る。

帰る車内にてアプロディアに連絡をし、

トレミーを崇宰邸上空で待機してもらおう伝える。

崇宰邸到着後

恭子

「では霧島さん、会談は1週間ぐらいしたら日程がわかるとおもいますのでそれまでお待ちください。」

春水

「はい、わかりました。」

恭子

「それと、明日からの訓練はよろしくお願いいたしますね。唯衣ちゃん達は明日ここに呼んでおきます。時間はいつ頃が宜しいですか？」

春水

「そうですね。∴明日の正午にここにまた来ます。」

恭子

「わかりました。ではまた明日お待ちしております。」

春水は恭子に別れを告げ、

小型艇を発進させトレミーに向かう。

とりあえず崇宰家の助力はえられた。

殿下との会談があるが、

明日からトレミーが賑やかになりそうだと春水は思いながら帰還するのだった。

5話

恭子、巖谷と会談を終えた次の日の朝

トレミー内部で春水はアプロディアと今日の日程を話し合っていた。

春水

「今日の昼に崇宰邸へトレミーで向かい、崇宰さん並びに数名をトレミーに案内する。で、そのあとはシミュレーターを使いバウの操縦訓練をおこなう。」

アプロディア

「はい、了解しました。マスター、パイロットスーツを用意したほうが宜しいですか？またマスターと同じタイプで構いませんか？」

春水

「同じで構わないが、ヘルメットは俺と違い黒で統一してくれ。」

アプロディアと話していると巖谷から連絡がはいり、

サンプルとして送るバウを市ヶ谷の基地に届けてほしいとのことだった。

春水は恭子達を回収後市ヶ谷に向かうことをアプロディアに指示。

約束の時間まで春水は訓練することにした。

恭子 s i d e

崇宰邸 時刻正午

春水の到着を待つ者たちが集まっていた。

崇宰恭子、篁唯衣を含め7名

1名は恭子の護衛、残りの4名は唯衣と同じ訓練兵である。

なお各自手荷物を持っており、衛士としての装備である

強化装備を用意していた。

赤い軍服を着ている護衛の名は

如月 佳織（きさらぎ かおり）

日本帝国斯衛軍所属 階級は中尉

セーラー服を着た4名の名は

甲斐 志摩子（かい しまこ）

石見 安芸（いわみ あき）

能登 和泉（のと いずみ）

山城 上総（やましろう かずさ）

唯衣と同じ山百合女子衛士訓練学校 在中

当初4人は唯衣に連絡をもらい篁邸に集まっていたのだが、崇宰家の使いが篁邸を訪

ねてきてそのまま崇宰邸へ。

4人は崇宰邸に来てからずっと緊張していた。

そんな中志摩子が唯衣に話しかける。

志摩子

「ねえ、ゆ、唯衣……私達何でここに居るの？」

唯衣

「何でって昨日電話で話したじゃない」

志摩子

「いや訓練するのは聞いたけど……」

唯衣と志摩子の会話に安芸、和泉も参加する。

安芸

「いやいやいや、だから何で恭子様の家にいるの？」

和泉

「そ、そうだよ」

彼女達は崇宰邸に集まる理由がわからなく唯衣にその答えをもとめていた。会話に参加してはいないが上総もそう思っていた。

唯衣

「……理由はもう少ししたらわかるよ。」

4人は唯衣にそう言われ渋々さがる。

恭子のほうも佳織に話しかけられていた。

佳織

「恭子様……護衛をもう少し増やしたほうがよいと思うのですが……」

恭子

「中尉その心配はありません。」

佳織

「ですが……」

恭子

「大丈夫ですよ。」

佳織は尚も恭子に進言しようとしていたが、

恭子に春水から連絡がいり進言を中断した。

恭子は一同に声をかける。

恭子

「では皆さん外に出ましようか」

恭子を先頭に各自荷物を持って外に向かった。

春水 side

アプロディアから崇宰邸上空に着いたことを聞き、訓練を止め小型挺へ移動後、恭子に連絡をいれてから小型挺を発進。

発進後崇宰邸を上空から見ていると玄関から2人の女性と5人の少女が出てきた。

昨日と同じ位置に小型挺を停め、春水は恭子に話しかける。

春水

「こんにちは崇宰さん、もしかして待たせちゃいましたか？」

恭子

「こんにちは霧島さん、いえ時間どうりですから大丈夫ですよ」

唯衣も1歩前に出て春水に挨拶をする。

唯衣

「こんにちは霧島さん、今日はよろしくお願いいたします。」

春水

「こんにちは篁さん。こちらこそよろしくね」

唯衣

「霧島さん、私のことは名前で呼んでもらってもかまいません。」

春水

「……わかったよ。その…唯衣ちゃん」

春水は少し気恥ずかしくなったが機を取り直して、
はあたりを見回し、人数をもう一度確認する。

春水

「これで全員ですか？」

恭子

「はい。」

春水

「わかりました。では皆さん小型艇にお乗りください。」

春水は皆を小型艇に案内する。

恭子達が乗り込み全員が席に着いたのを確認後、

春水はアプロディアに連絡をとる。

春水

「アプロディア、崇宰さん達を回収したこれより帰還する。」

アプロディア

「了解しましたマスター。」

8人に乗せた小型艇が離陸

唯衣達訓練兵は外の景色を見ながら、小型挺が空を飛んでいることに驚いているのか、各々感想を口にしていた。

小型挺がある高度に達すると恭子は少し前方の空間が揺らいでいることに気がついた。

恭子

「霧島さん、あれはいったい？」

春水

「ああ、まあ見ていてください。アプロディア、光学迷彩を解除後ハッチを開けてくれ。小型挺回収後、光学迷彩を再度発動してくれ。」

アプロディア

「かしこまりました。」

春水がそう言うのと前方の空間に変化が起きた。

空間が揺らめいたと思ったら、

そこにトレミーが現れた。

恭子達が驚いてるなか

小型挺を迎え入れる為か、上の方のハッチが開いていく。

春水が小型挺を動かし開いているハッチの中にはいると、

ハッチは閉じていった。

春水はまだ放心していた皆をとりあえず小型艇から降りるように促した。

小型艇から降り恭子達は更に驚く。

降りた先は格納庫であつた為、回りには恭子はデータで見えてはいたが機体が並んでいた。

全員

「す、すいい」

春水は手を叩き皆の意識をこちらに向ける。

春水

「とりあえず移動しましょう。ついてきてください。」

春水は皆を連れ格納庫を出て、食堂へ向かう。

食堂へつき皆を席に座らせたあと、春水は恭子と唯衣以外に自己紹介をする為、席を立つ。

春水

「俺は霧島春水。今日はよろしく」

それにもない恭子、唯衣以外が席を立ち各々挨拶をする。

佳織

「私の名は如月佳織。斯衛軍所属の衛士で階級は中尉。今日は恭子様の護衛としてきたがよろしく頼む」

志摩子

「甲斐志摩子と申します。私達は唯衣と同じ山百合女子衛士訓練学校に通う訓練兵です。今日はよろしくお願いいたします」

安芸

「石見安芸つていいいます。よろしくお願いいたします」

和泉

「能登和泉です。よ、よろしくお願いいたします」

上総

「山城上総よ。よろしくお願いいたしますわ。」

春水は皆を席に座らせ、今日の訓練内容を伝える。

春水

「これから皆さんにはシミュレーターを使って機体を動かす訓練をおこなってもらいます。」

佳織

「機体を動かす訓練だと………訓練兵の5人はともかく私や恭子様にはそんなこと今さ

「ら必要ないだろ」

春水

「……問題なく動かせれば次の訓練をおこないますが多分無理だと思います。」

佳織

「なんだと貴様!!」

佳織は立ち上がり春水につかみかろうとしたが恭子に止められる。

恭子

「如月中尉控えなさい。」

佳織

「しかし!!」

恭子

「私達はここに喧嘩をしにきたものではありません。訓練にきたのですよ。それに私達は霧島さんに教えをこう立場なのですから霧島さんのやり方に異を唱えてはなりません。」

佳織

「……恭子様がそうおっしゃるのでしたら」

佳織は席に座り直す。

春水は佳織が座つたのを確認し皆に質問があるか聞く。

春水

「何か質問はありますか？」

佳織、和泉以外手を挙げ質問をする。

恭子

「先程如月中尉が言われましたが、機体を動かす訓練を私と如月中尉がおこなう理由を教えてくださいもらってもよろしいですか？」

唯衣

「訓練に使われる戦術機は先程見たあの戦術機ですか？」

志摩子

「あのこの船？はいったい？」

安芸

「この船他に人はいないの？」

上総

「あの機体といいこの船といいみたこともない。貴方はいったい何者なのですか？」

春水

「とりあえず1人ずつ答えます。まずは崇宰さんの質問ですが、これからおこなう訓練

の機体は皆さんが知ってる戦術機と丸つきり別物です。使われているOSが違うためそれに慣れてもらうために機体を動かす訓練をしてもらうのです。」

恭子

「なるほどわかりました。」

春水

「次に唯衣ちゃんの質問だけど、使う機体はさつき見たあの機体だがあれは戦術機ではない。」

唯衣

「戦術機ではない？」

春水

「あれはMS（モビルスーツ）と呼ばれる有人兵器」

唯衣

「MS……………」

春水

「唯衣ちゃんの質問の続きは山城さんのときに答えるよ。じゃあ次は甲斐さんと石見さんの質問だけどまず甲斐さん…この船は外宇宙航行艦プロマイウス2またの名をトレミーと呼び、船と言うより戦艦かな。で石見さん…この艦には人間は俺だけだよ。」

志摩子

「戦艦なのですか！え、でも浮いてますよ？」

安芸

「1人で動かせるの？」

春水

「特殊な動力で動いているからとしかちよつと言いようがないかな。あと1人では流石に無理だよ」

志摩子

「は、はあ」

安芸

「え、じゃあどうするの？」

春水

「石見さんの質問も唯衣ちゃんと同じで山城さんのときに答えるよ。さてじゃあ山城さんの質問だけど、俺はこの世界の人間じゃない」

山城

「えっ……………」

春水

「とりあえず巖谷中佐にしたように俺が何者か話そう。」

春水は恭子と唯衣は知っているが知らない人のため自分がどうしてこの世界にいるか話した。

春水

「山城さん、この戦艦やあのMSは異世界の兵器なんだよ。」

上総

「異世界の人間……兵器……」

春水

「それと出てきてくれアプロディア」

春水が呼ぶとアプロディアはホログラム体で春水の横に姿を表した。

アプロディア

「お呼びでしょうかマスター」

皆アプロディア見て口を明け驚き言葉を失っている。

春水

「石見さん、この艦はアプロディアが動かしているんだよ。」

安芸はゆっくり頷いた。

春水は回りをみながら話す。

春水

「もしなにか困ったことがあつたらアプロディアを呼んでくれ。さてじゃあそろそろ訓練を始めようか。」

春水は皆に立ち上がるよう促し、更衣室に案内する。

更衣室の前につき春水は恭子にたずねる。

春水

「ここが更衣室ですからこの中で着替えてください。あと崇宰さん皆さんパイロットスーツはいりますか？」

恭子

「いえ大丈夫です。訓練ですから皆に強化装備を持ってきてもらいましたから」

春水

「強化装備?……一応パイロットスーツは用意してあるので必要ならアプロディアに言つてくださいね。では俺も着替えますからまたあとで」

春水はその場をあとにし別の更衣室でパイロットスーツに着替えシミュレータールームに入った。

しばらくして強化装備を着た恭子達が入ってきた。

春水は恭子達を見て言葉を失った。

強化装備を知らなかったとはいえまさかスタイルがはつきりわかるほどびっちり身体に張り付いているとは思わなかった。

しかも7人全員綺麗な女性だから尚更だ

春水は直ぐに目をそらしたが顔が熱くなるのがわかり、顔が赤くなっているのが容易に想像できた。

恭子

「お待たせしました。…………霧島さん顔が赤いですがどうかしましたか？」

春水

「え、あ、いや、その…………た、崇宰さん達はその…………は、恥ずかしくはないのですか？」

恭子

「恥ずかしい？何がですか？」

恭子達には心当たりがなく首をかしげる。

春水

「そ、その…………身体の輪郭がはつきり出ちゃってるじゃないですか」

春水の言葉を聞いて唯衣達訓練兵は恥ずかしくなったのか、顔が赤くなっている。

恭子

「ああ、そのことですか。戦術機に乗る以上しょうがないですからとつくに慣れました

よ。」

春水

「そ、そうですか」

佳織

「おいおい顔が赤いぞ。そんなんで大丈夫かよ」

佳織は春水を小馬鹿にするように茶化す。

春水

「しよ、しようがないじゃないですか皆綺麗でスタイル良いんですから。そんなことより早く訓練をやりましょう」

春水は皆に背を向け球体のに近づく。

春水

「では皆さんシミュレーターを起動しますからこの中にはいつてくください」

恭子

「それがシミュレーター機ですか？私が知っている形と随分変わっていますね」

春水

「これはパウなどのコックピットと同じ形をしています」

皆シミュレーター機に入り準備をする。

準備が完了したのを確認し春水はアプロディアに起動するよう指示を出す。

春水

「アプロディア、起動してくれ。で、起動したら操縦方法を教えてあげてくれ。」

アプロディア

「かしこまりました。では起動します。」

全シミュレーターが起動し、

壁にあるモニターに全員の顔と機体が映る。

全員通信が繋がっているため口々に感想等を話し合っていたが、アプロディアから操縦方法が伝えられ始めると全員静かに聞いていた。

操縦方法を伝え終わったのを確認し通信機を使って

春水は全員に話しかける。

春水

「では訓練を始めます。まずは崇宰さんと如月さんの2人にやってもらいます。唯衣ちゃん達は先ずは見ていてください。では始めてください。」

恭子

「わかりました。では………きゃあ」

佳織

「了解。……………っ」

恭子、佳織両名とも機体を前に動かそうとして転倒した。

それを見ていた唯衣達は驚きの声をあげていた。

春水

「これは戦術機とOSが全然違うため戦術機と同じ様に動かしたら転倒しますよ。じゃあ唯衣ちゃん達も始めようか。」

唯衣、上総、志摩子、安芸、和泉

「は、は、は」

訓練を開始してから2時間経過

恭子、佳織の両名はコツを掴んだのかぎこちないながらも機体を自由に操作していた。

唯衣達訓練兵は思うようにいかず少し動いては転倒を繰り返していた。

春水はやはり衛士と訓練兵では機体の感覚を掴む早さにばらつきがあるかと考えていた。

そんな春水にアプロディアが話しかける。

アプロディア

「マスター、まもなく市ヶ谷基地上空につきますので準備をお願いします。」

春水

「ん、ああ。巖谷中佐にバウを届けるんだったな。わかった準備してくる。」

部屋を出て格納庫に向かう途中、春水はアプロディアに頼み事をする。

格納庫につき春水はバウに乗り込みアプロディアからの指示を待つ。

アプロディア

「目的地上空に到着しました。巖谷中佐に連絡をいれますのでもうしばらくお待ちを。」

春水

「はいよ。」

しばらくして

アプロディア

「マスター、巖谷中佐から許可がおりました。発進準備に移行します。」

トレミーの格納庫ハッチが開き、春水はバウを動かし

カタパルトへバウを固定し準備を終える。

アプロディア

「発進準備完了。マスター、バウへコントロールを譲渡します。いつでもどうぞ」

春水

「了解。バウ、霧島春水でるぞ。」

カタパルトから勢いよく出撃。

眼下に見える市ヶ谷基地に春水は降下を開始

春水

「アプロディア、巖谷中佐にバウを渡し終えたら小型艇を頼むな」

アプロディア

「了解しました。」

基地に近づくにつれたくさんの軍人がこちらを見ている。

その中に巖谷中佐を確認し春水は近くに降りるため機体を動かそうとしたとき、コックピット内にアラームが鳴る。

リーダーには3機の戦術機がこちらに向かってきているのが映っていた。

春水

「なんだ？」

アプロディア

「マスター、巖谷中佐から連絡です。そちらに回します」

トレミーから通信が送られてきた。

巖谷

「霧島君すまない。部下が指示を無視し君を撃墜するために出撃してしまった。」

春水

「それはまたなんでです?」

巖谷

「基地の者達に通達はしていたのだが君を他国のスパイと思つたらしくてね。申し訳ない」

会話している最中にも3機がどんどん接近してきていた。

春水

「巖谷中佐とりあえず無力化して構いませんか?」

巖谷

「……構わないよ。撃墜しても君に非はない。」

春水

「いえ、殺しはしませんよ。機体を無力化します。」

3機はこちらを射程に捉えたのか、

マシンガンを発射してくるが、春水は上下左右に機体を動かし全て回避する。

春水

「ビームライフルじゃ不味いから使えるのはビームサーベルだけか。まあなんとかなる

か

ビームライフルを左手に持ち右手でビームサーベルを構えバウのスラスタを吹かし3機に接近する。

3機は弾幕を形成し春水を近づけないようにしていたが、バウの機動性についていけないのか弾を当てられないでいた。

そんななか1機の戦術機が弾切れをおこしロードをしようとしていたが、そんな隙を見逃す春水ではなく戦術機の横をすれ違いざまに両手を切断。

2機になった戦術機は1機が接近、もう1機が支援にまわる。

刀らしきものを構え接近してくる戦術機を無視し、

春水は急上昇し、支援機に向かって急降下

マシンガンを構えこちらに向かって撃つてはいたが、

最初の1機と同じ様にすれ違いざまに両手を切断される。

春水は直ぐに機体を旋回し最後の1機にむかう。

戦術機もこちらに向かって来ていたためすぐに格闘戦が開始される。

戦術機は刀を巧みに使い春水に斬りかかってくる。

上段から振り下ろし手首を返して横風ぎに繋げ流れるように連撃を繰り返して来るが、春水には当たらない。

連撃で機体に不可がなかったのか相手は一瞬硬直してしまい、そのまま両手を春水に切断され全ての戦術機が無力化される。

春水

「よし終わったな。巖谷中佐これより降下します。」

巖谷

「……ああ、了解した。」

春水は地上におりバウを格納庫に入れ機体から降りる。

同時に基地の人達がバウに集まってくる。

格納庫の離れた所に無力化された戦術機も入ってきた。

機体から少し離れた春水の元に巖谷が近づいてくる。

巖谷

「すまなかつたね霧島君。」

春水

「いえおきになさらず、なんともありませんから」

巖谷は頭を下げようとしたが、春水に止められる。

同時に春水にやられた3機の衛士がこちらに来るのが見てとれた。命令違反をした

3人が拘束されないのを見て春水はすでにある仮定に至っていたが巖谷が言いだすのを待つことにした。

巖谷

「それにしても君は強いな。3人の衛士を相手にして無傷でしかも無力化してしまうとは」

春水

「機体のおかげですよ。俺はまだまだ未熟です。」

巖谷と話していると3人の衛士の1人が巖谷に話しかける。

「中佐どうでしたかあの機体は。我々が敗れた意味はありましたか」

巖谷

「ああ中尉十分にな」

春水

「やっぱりですか」

巖谷

「気づいていたんだね。そうだ、君の腕前とあの機体の性能をこの目で見てみたくな。ね。」

春水の仮定は当たっていたが試されたことにすこしだけ機嫌が悪くなるのがわかつ

た。

春水はアプロディアに小型艇を下ろすように指示。

バウから少し離れた所に着陸、春水は巖谷にもう帰還することを告げる。

春水

「それでは巖谷中佐、俺はこれで」

巖谷

「もう行くのかい」

春水

「はい。崇宰さん達の訓練がありますから」

巖谷

「そうか。崇宰様や唯衣によろしくな」

春水

「はい。では失礼します。」

春水は小型艇に乗り込みトレミーへ帰還する。

アプロディア

「マスター、大丈夫でしょうか。機嫌が悪いようですが」

春水

「大丈夫だ。ちょっとだけイラっとしただけだから。心配かけてすまない」

春水はアプロディアに謝ったあと気持ちを切り替えて、

訓練をしている恭子達の元へむかう。

ただちよつとしたことで精神が不安定になるのを何とかしないといけないなど春水は思った。

6話

時は少し遡り

春水がバウを市ヶ谷基地に届ける為、

プロレマイオス2から発進後、

シミュレータータートルーム内では

恭子達がアプロディアに休憩するよう言われ、

訓練を中断し休憩していた。

アプロディア

「皆さん軽食やお飲み物等を隣の部屋に用意いたしますのでそちらへ移動してください」

恭子

「わかりました、では皆さん移動しましょう」

隣の部屋に移動し、各々席につき訓練の感想を口にする。

恭子

「まさかここまで戦術機と違うとは思いませんでしたね中尉」

佳織

「…そうですね。正直すぐに機体を自由に動かして霧島殿に文句を言おうと思っ
てました。ですがまさか転倒するとは…」

佳織は凄く悔しそうな顔を見て恭子は苦笑していた。

恭子

「唯衣ちゃん達はどうか？」

唯衣

「私達は戦術機の実習前でしたので戦術機との違いはわかりませんが、凄く難しいです」

上総

「自由自在に扱える迄に時間がかかるとおもいますわ」

志摩子

「でも、唯衣と山城さんは凄いと思うよ。転倒回数が少なくなつて歩けるようになって
きてるし」

安芸

「そうだよ。それにくらべたら私達はさ……………」

和泉

「うん。まだまだかかりそう」

感想を言い合っているとモニターにアプロディアが現れ恭子達に用意が出来たことを伝える。

アプロディア

「お待たせしました。モニター脇の排出口から飲み物、軽食をお取りください」

恭子達は排出口を開け中にある物を取りだしテーブルに置いていく。

テーブルの上にはポットに入った紅茶に角砂糖と1人2枚のホットケーキに蜂蜜、バターが並べられている。

各々食べる準備をした後、恭子が話しかける。

恭子

「これは確かホットケーキだったかしら？」

唯衣

「えっと、そうだと思います」

戸惑うのも無理はない。

この世界の食糧事情では滅多に見られない食べ物であるのだから。

アプロディアが恭子達に食べるよう促す。

アプロディア

「マスターから皆さん訓練で疲れ、お腹がすいているでしょうから出すようにとの指示

がありました。皆さん召し上がってください」

全員

「い、頂きます」

蜂蜜をかけたバターを塗った後ひと口頬張る。

全員揃って微動だにしなくなるなか、安芸が叫ぶ。

安芸

「うま~~~~~い」

安芸の叫びで全員再起動し、

瞬く間にホットケーキを完食する。

紅茶を飲み一息ついた後口々に感想をのべ始める。

恭子

「ふつくらしていても美味しかった」

佳織

「ホットケーキってこんなに旨いのか!!」

唯衣

「程よい甘味があって美味しかったです」

上総

「こんなに美味しいもの食べたことありませんわ」

志摩子

「訓練に来てよかった」

安芸

「う〜、もつと食べたい」

和泉

「また食べたいね」

暫く感想を言い合っているとモニターに再度アプロディアが現れ恭子達に話しかける。

アプロディア

「皆さん満足頂けましたか？」

恭子達は頷いた。

アプロディア

「それはよかったです。」

アプロディアが微笑んで恭子達を見ているなか、

恭子はふと疑問に思ったことをアプロディアに聞いた。

恭子

「アプロディアさんに1つお聞きしたいのですが……あのホットケーキは合成食材で作られたものじゃないですよ。そうなると原材料は一体何処でてにいたのですか？」

恭子の言葉を聞き皆が驚き、

アプロディアの映るモニターを見る。

アプロディア

「ご明察通りあれは合成食材ではありません。れつきとした本物の材料で作られております。原材料についてですがそれは………!!」

恭子達に説明をしていたアプロディアの表情が驚きに変わった。

恭子はアプロディアの変化が気になりどうしたのかたずねる。

恭子

「アプロディアさんどうしましたか？」

アプロディア

「マスターが市ヶ谷基地所属の衛士3名と戦闘にはいりました。映像をモニターに映します」

モニターからアプロディアが消え、

恭子達の前にホログラム体で現れモニターは、

春水の乗るバウが3機の戦術機と交戦状態にはいった映像に変わる。

唯衣

「あの戦術機は……」

佳織

「瑞鶴だな。あの3機動きからして中々の腕前だな」

恭子

「な、何故交戦しているのですか！」

アプロディア

「巖谷中佐の通信によれば、あの3名は命令違反でありマスターが他国のスパイだと思っっているようですね」

恭子

「なっ……」

恭子が絶句している間に

3機の瑞鶴がバウに向かって攻撃を開始していた。

攻撃が開始されて直ぐ恭子が我に返りアプロディアに話しかける。

恭子

「アプロディアさん市ヶ谷基地の巖谷中佐に連絡出来ますか？」

アプロディア

「出来ませんがその必要はないかと」

恭子

「何故ですか！早く止めなければ霧島さんが……………えっ？」

恭子がモニターに視線を戻すと春水の乗るバウが瑞鶴の両腕をビームサーベルで切断していた。

恭子

「あれは確か…」

佳織

「あの機体の手首から筒みたいなのが出てきて、それを掴んだらあんな武器が現れました。恭子様はあれがなんなのか知っていますのですか？」

そうこうしてうちに春水の乗るバウは瞬く間に残りの瑞鶴の両腕も切断し無力化し、戦闘が終了した。

アプロディアが恭子達にこれからのことを伝える。

アプロディア

「マスターから連絡があり小型艇を発進させ帰還後京都に向け艦を移動させます。先程の質問はマスターが戻られましたら、マスターに聞いてください」

素晴らしい残しアプロディアは姿を消した。

残された恭子達は先程の戦闘の衝撃が抜けないのか

訓練をせずそのまま春水が帰還するまで休憩室で座っていた。

春水 side

市ヶ谷基地へバウを送り、小型艇で帰還

なんとか気持ちを切り替えて小型艇から降りシミュレータールームへ向かう。

格納庫から出てすぐにアプロディアが話しかけてきた。

アプロディア

「マスター、皆さんシミュレータールームではなく隣の休憩室で休んでおられます。

それと指示通りホットケーキを皆さんにお出しいたしました」

春水

「わかった。それで皆さん喜んでくれた？」

アプロディア

「はい。石見さんはもつと食べたがっておりますが。」

春水

「はは、流石に今日は無理だよ」

アプロディアと話しているうちに休憩室にたどり着き、

中に入ると恭子達の視線が春水に集まった。

ホットケーキを食べ喜んでいっていると思っていたが、恭子達の顔つきを見る限りどうやら違うようだ。

春水

「……ん？……どうかしました？」

恭子

「実は……先程その……市ヶ谷基地での戦闘映像を見ていたんですよ」

春水はそれを聞いても、それで何故こんな状態なのかいまいちピンときていない。

そんななか佳織が春水に聞く。

佳織

「機体の事で今さら聞きはしないが、あの武器はいったい何だ？」

佳織の言葉を聞き皆を見ると、恭子以外は自分達も知りたいという顔をしていった。

春水は別に教えるのは構わないから場所を変えることにした。

春水

「口で説明するより見た方が早いからシミュレータールームに行きましょうか」

全員席から立ち上がりシミュレータールームに移動

春水

「今から俺が訓練しながら武器の説明をします。質問は全部説明してからにしてください」

恭子達が頷くのを確認し、機械に入りシミュレーターを起動する。

モニターに春水の乗るバウが映り、恭子達の視線がそちらをむく。

春水

「武器の説明をするのに的があつた方が威力も分かりやすいと思いますから、的を用意しますね。アプロディア、BETAを各種類1体ずつ頼む」

アプロディア

「かしこまりましたマスター」

モニターに兵士、戦車、光線、突撃、要撃、要塞級が春水の前に現れる。

恭子と佳織は目付きが鋭くなり、実際見たこと無い唯衣達は口々に確認していた。

春水

「では説明を始めます。まずは先程見たこれからですね」

春水は右手にビームサーベルを抜刀する。

春水

「これはビームサーベルといってビームを刃とし対象を焼き切ります。ビームがいまいちわからないのでしたら、光線級のレーザーを刃にしたものと思ってください。では切

れ味をお見せします」

そういつてから春水は全てのBETAを切り裂いていった。

恭子達が一番驚いていたのは、突撃級の装甲をいとも容易く切り裂いたときだった。

全て切りサーベルをしまい左手に持っていたライフルを右手に持ちかえると、BETA Aがまた表示される。

春水

「次は射撃武器を紹介します。右手に持ったこれはビームライフルといい、ビームを弾として発射します。このライフルはモード切り替え可能で本来は狙撃と連射ですが、改造して収束と連射にしております。Eパック方式でエネルギーが切れたら、実弾と同じように弾倉を変えるようにEパックを交換します」

春水はライフルを構えまずは収束でBETAを撃ち抜いていく。

収束は1発ずつ発射されるが通常より少し威力は高い

ライフルから発射されたビームはBETAをあつとゆうまに肉塊にしていく。

またBETAが表示され、春水はライフルを連射に切り替えて再度BETAに向け発射する。

連射とゆうだけあつてビームをマシンガンのように発射し、収束と違いBETAを細切れにしていく。

春水

「次は実弾兵器を紹介します。この機体には両手首と背中に装備されています。まず両手首には2発ずつ計4発のグレネードランチャー、背中には6発のミサイルがあります。本来ならこのミサイルは可変機になってから使いますが、可変機構は排除してあるのでそのまま使えるようにしてあります」

BETAにグレネードとミサイルを発射。

グレネードは真つ直ぐ、ミサイルは垂直に飛んだ後放物線を描くようにBETAに向かつていき着弾。

爆風が晴れた後は黒焦げの肉片が散らばっていた。

春水

「次で最後です。最後の武器はこのシールドに装備されているメガ粒子砲です。メガ粒子砲はビームライフルより威力が高いのが特徴ですが、ビームライフルと違いEパックではないので撃ちすぎるとエネルギー切れを起こします。砲門は全部で5カ所あり真ん中の3カ所は収束して撃つことが可能です。又個々に動かすことも可能なので拡散して広範囲に撃つこともできます」

BETAが1列になる場所に移動後メガ粒子砲を収束で発射。

BETAはビームにのまれ跡形もなく消滅した。

春水は訓練を止め、機械から降りて恭子達のほうを見る。

春水

「何か質問は？」

恭子

「データで光学兵器があることは知っていましたが……実際に見てみると改めて凄いと
思いました」

佳織

「質問は特に無いが突撃級の装甲をいとも容易く貫く兵器があるとは思わなかった」

春水

「唯衣ちゃん達はどうか？」

唯衣

「い、いえ私達は特にありません」

唯衣の言葉に上総達は頷いた。

春水は質問が無いことを確認した後、アプロディアに話しかける。

春水

「アプロディア、京都に帰還するからトレミーを発進させてくれ。で、ついたら訓練は終了。崇宰さん達を家に送るから小型挺の準備も頼む」

アプロディア

「了解しました」

春水は恭子達に話しかける。

春水

「市ヶ谷基地に来るのに2時間で色々ありましたから、京都には6時くらいにはつけると思います。それまで訓練をします」

恭子達は領き、各々機械へ乗り込みシミュレーターを起動。

黙々と訓練に打ち込んだ。

どうやら春水の操縦技術をみたのと、バウの装備がBETAを倒すのに有効だとわかったのだから、なんとしても機体をものにしようとしていた。

2時間後

春水は京都に着き訓練終了を恭子達に告げ自室へ着替えに行き、恭子達は更衣室へ行きシャワーで汗を流した後アプロディアに連れられ格納庫へ。

格納庫には既に春水が待つており、恭子達を小型挺へ

全員が乗り込んだのを確認し小型挺を発進させる。

小型挺内で恭子が話しかけてきた。

恭子

「霧島さん今日はありがとうございますございました」

春水

「いえこちらこそ。慣れない操縦は大変だったと思いますが大丈夫でしたか？」

恭子

「確かに大変でしたが良い経験になりました。それで霧島さんに相談なのですが……」

春水

「なんですか？」

恭子

「明日からも訓練をさせてもらえませんか？私と如月中尉もですが唯衣ちゃん達は今から戦術機に乗ったら操縦の違いに戸惑うと思うのです」

春水

「それは別に構いませんが、崇宰さんや如月さんはお仕事は？唯衣ちゃん達だって学校がありますよね」

恭子

「私と如月は問題ありません。唯衣ちゃん達は崇宰の名を使いますから大丈夫です」

春水は家の名を使うと聞き微妙な気持ちになった。

春水

「えくと、その本当に大丈夫ですか？」

恭子

「大丈夫です」

春水

「そ、そうですか。ゆ、唯衣ちゃん達もそれでいい？」

唯衣達

「」「」「よろしくお願いします」わ」「」

どうやら唯衣達もそのつもりらしく迷いなく答えた。

ほどなくして崇宰邸に着き恭子達が降り春水も降りる。

春水

「ではまた明日も迎えに来ますね。時間は早くても構わないですか？」

恭子

「はい大丈夫です」

他の皆も頷き、了承する。

春水

「では明日は朝8時に迎えに来ます」

恭子

「わかりました。また明日もよろしくお願いいたします」

恭子が頭を下げ、それに続くように皆も下げる。

春水は小型艇に乗り込みプロレマイオス2に向け帰還。

格納庫についてのち春水はアプロディアに話しかける。

春水

「アプロディア、崇宰さん達のパイロットスーツを明日は用意しておいてくれ。あと崇宰さん達の強化装備の色の違いについても調べてほしい」

アプロディア

「はいわかりました。マスター他にはありますか？」

春水

「あとアクシズでMSと戦艦の生産を頼む。MSはバウ、ドライセン、ガ・ゾウムの各合計を100機に戦艦はムサイ改を20艦頼む」

アプロディア

「了解しました。マスター色についてですが調べ終わりましたので報告します」

春水

「随分早いな。まあいいか教えてくれ」

アプロディア

「あの色はどうやら位を意味しているらしいのです。崇宰殿は蒼ですが、あれは彼女だけではなく五摂家を表す色です。如月殿は五摂家に近い家柄の者のようでそのものの色は赤です。マスターかお会いになる政威大將軍の色は紫。篁殿は白を着てましたが本来は違い譜代武家を表す山吹色です。山城殿達は一般武家、外様武家で色は白。平民は黒だそうです」

春水

「なるほど。じゃあ明日はパイロットスーツを蒼、赤、山吹色を一つずつ、残りは白で」
アプロディア

「マスターと同じヘルメットだけですか？」

春水

「ヘルメットはそれでいい。スーツは縁取りやベルト部分の色を変えてくれ。あとMSも3機色変えを頼む」

アプロディア

「了解しました」

春水はアプロディアに頼んだ後早めの夕食を食べた後、

シミュレータールームでラファエルを使い今日市ヶ谷であったストレスを発散した。

4 時間後

汗を流し自室へ戻り少しすると恭子から連絡がきた。

明日の事だと思ひ春水は電話に出る。

春水

「もしもし」

恭子

「もしもし、夜分遅くに申し訳ありません」

春水

「いえ大丈夫ですよ。それでどうしましたか？明日の事でしょうか」

恭子

「いえ明日の事ではありません。霧島さん、殿下との会談日時が決まりましたので連絡いたしました」

春水は殿下との会談の日時が決まったと聞き姿勢を但し、恭子の話を聞いた。

春水

「いつ頃ですか？」

恭子

「今週の土曜の深夜12時。今日が水曜なのでほぼ3日後ですね。霧島さんは大丈夫で

しようか」

春水

「問題ありません」

恭子

「ではよろしくお願いいたします。ではまた明日」

春水

「あ、崇宰さん一つよろしいですか？」

恭子

「?……なにかありましたか？」

春水

「明日はこちらでパイロットスーツを用意いたしますので強化装備は置いてきてください」

い

恭子

「強化装備をですか………わかりました、皆に伝えておきます」

春水

「ありがとうございます。ではまた明日」

恭子

「はい、では失礼しました」

電話が切れた後、アプロディアに会談日時を教え春水はベットに横になる。

会談日時が決まり、政威大將軍の協力が得られるかわからないがやれるだけの事はやろうと決め、明日の訓練内容を考えながら春水は眠りにつくのだった。

7 話

次の日の朝アプロディアに恭子達の迎えを頼み、自室でパイロットスーツに着替えてから食堂で朝御飯を食べる。

お茶を飲みゆつくりしていると、格納庫に小型艇が着艦した音が聞こえたので、食器や湯呑みを片付けて格納庫へ向かう。

格納庫に着くと恭子達が機体を見ながら話し合っていた。

昨日と違い3機の色が変わっているのだから、恐らく自分達が乗る機体じゃないかと話し合っているのだろう。

そんな恭子達に春水は話しかける。

春水

「皆さんおはようございます」

挨拶を聞き、恭子達は春水のほうを向き挨拶を返した。

全員

「おはようございます」

春水

「それでは昨日と同じく更衣室に行きましようか」

春水が恭子達に背を向け更衣室に向かつて歩き出そうとしたら、佳織から声を掛けられる。

佳織

「ちよつと待て、今日は強化装備を持ってこなくていいとは言われたが更衣室に行く意味はあるのか？」

佳織の質問に背を向けたまま答える。

春水

「昨日も言ったと思いますが皆さんのパイロットスーツはこちらで用意してありました。強化装備を着るということで使いませんが、今日は皆さんにはパイロットスーツを着て訓練してもらいます。では行きましよう」

春水は歩き出し、恭子達も更衣室へ向け歩き出した。

更衣室に着き恭子達は中に入る。

春水

「スーツの着方はアプリディアに聞いてください。ではシミュレータールームで待つてますね」

シミュレータールームで待つこと数分

恭子達が部屋に入ってきたので、今日の訓練内容を説明するがその前に恭子が話しかけてきた。

恭子

「このスーツは身体にぴっちり張り付かないのですね」

春水

「はい、着心地が悪いですか？」

恭子

「いえ問題ありません。確かにこれなら身体の輪郭はそこまで気にならないですね」

春水は恭子の話を聞き、昨日の強化装備を着た恭子達の姿を思い出してしまい顔が赤くなっていた。

そんな春水を見て佳織がニヤニヤしていたが、

春水は咳払いをして今日の訓練の説明をする。

春水

「今日の訓練は別々に分かれて行います。まず崇宰さんと如月さんは10時迄操縦訓練をおこない、その後は訓練終了迄戦闘訓練をやってもらいます。唯衣ちゃん達は12時迄操縦訓練をおこない、午後から射撃訓練をやってもらいます」

恭子

「戦闘訓練とは具体的に何をやるのですか？」

春水

「最初に射撃訓練、格闘訓練、回避訓練をおこないその後、BETAとの実戦を想定した模擬戦をおこないます。尚、模擬戦のBETAは実戦を想定しているので攻撃してくるのでその事を理解してください」

恭子

「わかりました。中尉もよろしいですね」

佳織

「はい、問題ありません」

春水

「唯衣ちゃん達は大丈夫？」

唯衣

「問題ありませんが、1つだけ質問してもよろしいですか？」

春水

「いいよ。何か気になることでもあったかい？」

唯衣

「私達は格闘、回避訓練をやらないのですか？」

春水

「言い方が悪いけど、今はまだ操縦技術が低いから機体をもっと扱えるようになってからかな。但し午前中の訓練結果次第では戦闘訓練に変わるかもしれない」

唯衣

「……わかりました」

春水

「では訓練を始めましょうか」

各々昨日使った機械に入り訓練を始める。

恭子、佳織は昨日機体特性を掴んだのか動きに無駄がなく、機体を自由に動かしていた。

唯衣達は先程の春水の言葉で火がついたのかぎこちないながらも機体を動かしていた。

春水はモニターを見ながらアプロディアに話しかける。

春水

「アプロディア、土曜日に政威大將軍との会談があるがやはり何か献上品があったほうがいいかな」

アプロディアが姿を表し、春水に答える。

アプロディア

「そうですね。相手の信頼を得るのであればあつたほうがいいと思います」

春水

「だよな。…………アプロディア、アクシズにあるアークエンジェルにバウを8機搬入してくれ。色は紫1機赤7機で頼む。アークエンジェルの色はそのままがいい。土曜日の夜に舞鶴基地から1キロ離れた日本海に潜水させておいてくれ」

アプロディア

「了解いたしました」

アプロディアが姿を消した後、モニターを見ながら春水は会談について考える。

春水

「とりあえず助力を得るための献上品はいいかな、最悪軍属になっても構わないけどその代わり独立部隊にしてみらおう、機体や技術を全部渡せてなつたらその時点で諦めようかな」

2時間後恭子達が一息つくため訓練を止め休憩に入った。

休憩室に移動した恭子達に春水が話しかける。

春水

「では休憩が終わったら崇宰さんと如月さんは戦闘訓練に入りましょうか。その際指示を出すので俺も自分の機体で中に入ります」

恭子

「そういえば霧島さんは御自分の機体があると仰っていましたね」

春水

「はい」

佳織

「あのパウじゃないのか？」

春水

「違います。全く構造が違う機体ですから戦いかたは参考にはならないと思います。では準備があるので先に行きますね」

数分後恭子達が休憩を終え、訓練を再開するのを確認後

春水はシミュレーターを起動し中に入った。

少し離れた位置に現れるようにしたので恭子達の元に飛行しながら向かう。

恭子達は春水に気づきこちらを見て待っていた。

春水は恭子達が乗るパウの近くに降り、話しかける。

春水

「お待たせしました」

恭子

「それが霧島さんの本来の機体ですか？」

春水

「はい。これが俺の愛機ラファエルガンダムです。」

佳織

「見た目が全然違うんだな」

春水

「見た目もそうです。武装も全く違います。じゃあそろそろ戦闘訓練を始めましょうか。唯衣ちゃん達はあと2時間操縦訓練頑張つてね」

唯衣、上総、志摩子、安芸、和泉

「わかりました（わ）」

唯衣達が訓練を開始したのを確認し恭子、佳織に訓練の説明をする。

春水

「では射撃訓練を開始します、まずは相手が止まった状態で射撃してもらいます。次に相手が動いた状態で同じように射撃してもらいますが、命中率が低いと相手はずつと止まったままなので注意してください。あ、あと2人は

自由に動いて構いません」

恭子

「わかりました」

佳織

「わかった」

春水

「では突撃級のBETAを出現させますので現れたら訓練開始です」

春水はそう2人に言い、空中に移動後BETAを出現させた。

現れたBETAに2人がビームライフルを収束、連射と使い分けながら次々と撃ち抜いていく。

佳織より恭子の方がどうやら命中率が高いようで倒すスピードが早くBETAが移動を始めた。

少し遅れて佳織の方のBETAも移動を始めた。

春水

「動き出し迄随分早いな、これ射撃訓練いらなかったかな？」

2人は動き出したBETAを機体を動かしながら撃破していくが流石に動きながらだと命中率が下がりがりなかなか倒せなくなっていた。

春水

「ライフルだけじゃなくミサイルやグレネードなども使って構いませんからね」
恭子と佳織はその後2時間射撃訓練を続けた。

8話

午前の訓練を終え全員で昼食をとり、休憩後訓練を再開

春水は恭子達に午後の訓練を説明する。

春水

「崇宰さんと如月さんは格闘訓練をおこなってもらいます。対人格闘の方が訓練になるので2人には同型機のバウと戦ってもらいます。唯衣ちゃん達は午前中の崇宰さん達のやった射撃訓練とは違い相手が動くことにはないから、ゆっくり落ちて着いて確実に当てるよう心がけること、尚機体を動かしながら訓練しても構わないからね」

恭子

「わかりました」

佳織

「わかった」

唯衣、上総、志摩子、安芸、和泉

「はい！」

返事を聞き春水はまず唯衣達の前方に戦車級を100体ほど前後左右バラバラに出

現させ、春水は唯衣達に話しかける。

春水

「まずはビームライフルを収束にして戦車級から撃ち抜いていこう。その後は突撃級、要撃級、要塞級の順番でBETAが出現するようにしてある。要塞級まで倒したら各種ランダムで出現するようにしてあるから、疲れたら休憩を挟みつつ訓練するようにね。じゃあ準備が出来たら各自始めてください」

唯衣達は横一列に並び戦車級に向かって射撃を開始

初めての射撃の為、倒すスピードは遅いが1体ずつ撃破していく。

春水はそれを確認してから恭子達に話しかけた。

春水

「ではこちらからはじめましょうか。これから出現するバウは強さが3段階あります。まずは新兵レベルから相手をしてもらいます。次に熟練兵で、最後にエースとなつていきます。最初の新兵を30機倒したら次に熟練兵15機最後にエース1機で倒されたらまた初めからやり直ししてもらいます。では準備出来たらいつでも始めてください」

そう言い、恭子と佳織の前方にバウを30機出現させる。

恭子と佳織はビームサーベルを右手に持ちスラストを噴かし突撃していった。

相手が新兵レベルでも数が多く更にバウでの格闘に慣れていないため少し苦戦して

いる。

唯衣 side

訓練が始まって私達はBETAを1体ずつ撃ち抜いていくが、私、志摩子、安芸、和泉は狙いがズレてなかなか中心に当たらない。

唯衣

「く、真ん中に当たらない」

志摩子

「動かないBETAに当てるだけなのに…」

安芸

「もう、難しいよ」

和泉

「でも頑張らないと」

苦戦している私達に比べ山城さんはそれほど苦戦していなかった。

上総

「これぐらいで苦戦するなんてまだまだですわね」

山城さんは私達に比べて早く正確に戦車級を撃ち抜いていく。凄いという気持ちと負けたくない気持ちが私の中にあり私ももつと頑張ろうと思った。

恭子 side

前方に展開しているバウに如月中尉と突撃していく。

相手の斬り上げをかわして、逆に斬り捨てるがすぐに次のバウが斬りかかってくるがなんとか対処する。

新兵レベルはどうやら唯衣ちゃん達ぐらいの力量らしく、私達でも楽ではないがやられることはない。

恭子

「これだけの数を相手にするのは流石に大変ですね」

佳織

「はい。1機ずつならたいしたことありませんが四方からこられると流石にきついですね」

相手の攻撃を捌きながら隙について斬り捨てる。

如月中尉の機体と背を向けながら、只ひたすらに訓練をこなしていく。

1時間経過後

唯衣達是要撃級を倒し終わり要塞級に敵が変わっていた。

1時間恭子達の訓練と交互に見ていたが、5人の中で射撃が1番得意なのは上総で不得意なのは安芸のようだ。

恭子達の方は新兵は倒したが熟練兵にやられ、新兵と再度戦っている。一対多の格闘訓練は流石に大変らしく佳織が文句を口にしながら戦っている。

更に1時間経過後

唯衣達はBETAの出現がランダムになり、収束と連射を使い分け機体を動かしながら訓練に励んでいた。

恭子達は熟練兵との戦闘を続けていたがまだまだ突破出来そうになかった。

春水は全員に休憩するよう伝え、BETA並びにバウを一旦消した。

シミュレーター内から恭子達のバウが消えたのを確認後

、シミュレーター内で恭子と佳織が次にやる回避訓練の準備をする。

正面に小高い丘を作り、その場所に光線級を50体配置し、訓練開始地点から丘までの道にあるバウを隠せそうな障害物を排除。

春水

「初めてだから正面だけでいいかな」

準備を終え暫くしてから休憩から恭子達が戻ると光線級が沢山いるのに気づき驚いていたが、春水は恭子達に光線級を使った回避訓練の説明をする。

春水

「これから崇宰さんと如月さんには回避訓練をしてもらいます。見てわかるようにこれ

は光線級のレーザーを回避する訓練です。何か質問はありますか？」

恭子と佳織は口々に質問をする。

恭子

「光線級のレーザーを回避ですか……そんなことは可能なのですか？」

佳織

「沢山の衛士が光線級に狙われて死んでるんだぞ。狙われたら最後……避けられるわけがない」

春水

「わかってます。だから今から俺が見本を見せます。実際に見た方が理解出来ると思いますから」

春水は恭子達に少し離れるよう指示してから回避訓練を始める。

丘にいる光線級が地上にいる春水に向かってレーザーを発射。

ラファエルを少しだけ空中に飛行し滑るように右へ回避する、それを合図に50体の光線級が春水を落とすためレーザーを発射。

波状攻撃にさらされながら春水は高度を上げていく。

高度を上げたことで、恭子達が何かいつていたが気にせず上下左右縦横無尽に動き全てのレーザーを回避する。

春水は避けてるだけじゃつまらないから光線級に向かつて

反撃を開始。

避けながらGNビームライフルを発射し徐々に光線級を撃破していく。

10分もかからず50体の光線級は全滅させ、春水は恭子達の元へ。

恭子達は絶句していたが構わず春水は話しかける。

春水

「と、まあこんな感じですかね。俺は反撃しましたが皆さんは初めてなので回避に重点を置いて訓練をしてくださいいね」

いち早く我にかえった恭子が春水に話しかけた。

恭子

「あれだけの光線級をあつさり撃破してしまふなんて……私達にもあんな風に出るのでしょうか……」

春水

「初めは何度も落とされるでしょうがこれはシミュレーターですから何度でも挑戦できます。俺だって何度も何度も落とされましたから。ひたすら挑戦して徐々に慣れていくしかないですよ」

春水は恭子と話ながら丘をもう2つ作り全てに光線級を配置する。

恭子

「あの霧島さん？回避訓練は私と如月中尉だけではないのですか？」

春水

「うん……ああ、いやどうせなら唯衣ちゃん達にもやってもらおうと思って」

それを聞いた唯衣達は吃驚していたので春水は説明した。

春水

「確かに最初は操縦と射撃訓練のつもりだったけどずっと同じこととしてたら飽きるだろうし、御座なりになるかもしれないからちようどいいかなって」

安芸

「いや……ちようどいいかなって言われても……」

唯衣

「わ、私達もあれをやるのですか……」

志摩子

「嘘でしょ……」

和泉

「ぜ、絶対無理だよ……」

上総

「……………本当に？」

唯衣達は軽く現実逃避していたけどとりあえず回避訓練を始めるため春水は恭子達に準備を促す。

春水

「じゃあ全員で始めようか。2人ずつに別れてそれぞれ開始地点で待機してください」

恭子達が準備をし、開始地点で待機したのを確認。春水は訓練開始を告げる。

春水

「それでは回避訓練開始」

開始と同時に光線級が恭子達に向かってレーザーを発射。

3機ともスラスターを噴かし初撃を避けてはいたが、レーザーは避けられないという概念があるためか動きが硬い。

2、3発避けたところで志摩子、安芸、和泉が撃墜され、その後直ぐに唯衣、上総が撃墜。

恭子と佳織はなんてか粘ったが唯衣達が撃墜されたため2人へのレーザーが増え撃墜された。

恭子達が復活したのを確認後

春水

「とりあえず回避訓練を1時間行いますから皆さん頑張ってください。あと地上だけじゃなく空中でも回避の練習してくださいね」

春水の言葉を聞き恭子達は絶望した感じだったがどのみちやらないといけないことなので、春水はあえて無視することにした。

1時間後回避訓練を行った結果全員完璧に落ち込んでいた

。もう目に見えて現実逃避している者のもいたが、回避訓練終了を告げ、光線級を消した。

春水

「あの……大丈夫ですか？と、とりあえず回避訓練は終了します。で、次は実戦形式の訓練ですができそうですか？」

恭子

「……………光線級は……いるのですか？」

恭子は春水を見て話しかけたが、春水は恭子の目を見て吃驚した。

恭子の瞳に光彩が消えていたため、正直怖かった。

春水

「い、いえ……こ、光線級は……い、いません」

光線級有りでやる予定だったが急遽予定変更。

光線級がないことがわかると恭子の瞳に光彩が戻り、次の訓練で回避訓練の鬱憤を晴らすのが目に見えてわかった。

恭子

「皆、次の訓練には光線級がないそうです。先程の訓練の恨みを他のBETAにぶつけましょう」

恭子の言葉を聞き佳織達がそれに同意し、春水に早く訓練を始めるようになってきた。勢いに流されるまま春水は戦車級、突撃級、要撃級、要塞級を正面を配置。

戦車級5000、突撃級2000、要撃級2500、要塞級500総勢10000のBETAの大軍だが春水は今の恭子達じゃ負けなだろうし、逆にBETAが憐れに思えた。

恭子達はいつでも突撃できる状態で春水の合図を待っていたので、春水は開始の合図をだした。

2時間後

10000いたBETAは瞬く間に殲滅されてしまい春水は正直恭子達に引いてしまった。

恭子達の鬼気迫る勢いでBETAを撃破していくのだから引いてしまってもしょうがないだろう。

1日の訓練が終わり恭子達を送ったあと夕飯を食べたあと、明日の訓練内容を見直しているとアプロディアが話しかけてきた。

アプロディア

「マスター、頼まれていたアークエンジェルですが明日の夕方には目的地に到着予定です」

春水

「わかった。ありがとう」

金曜、土曜と訓練を終え、土曜の訓練後恭子が春水に話しかけてきた。

恭子

「霧島さん、今日の殿下との会談ですが午後10時に我が家に来ていただけますか」

春水

「わかりました。じゃあ午後10時にまた伺います」

恭子達を送り、夕飯を食べ時間を潰し約束の時間が近づいたので着替え小型艇に乗り
崇宰邸へ向かう。

崇宰邸に着き玄関を叩く。

女中の方に連れられて応接室に通された後、少しして恭子が佳織を引き連れて表れた。

恭子

「お待たせして申し訳有りません。会谈には如月中尉は私の護衛として同席します。では少し早いです。が御所へいきましようか」

春水

「わかりました」

崇宰邸を出て車に乗り御所に到着し会谈まで応接室で待つことになった。

春水

「そういえば殿下とはどんな方ですか？若い方なんですか？」

恭子

「殿下は聡明な方で年齢は唯衣ちゃん達と同じです」

暫く雑談していると時間になり一人の女中が入ってきた。

「崇宰様お時間になりましたので殿下の元へ案内致します」

恭子

「では霧島さん、如月中尉いきましようか」

女中の後に続き暫くして一つの部屋の前に止まり女中は中に向け声をかける。

「皆様をお連れいたしました」

すると中から声が返ってきた。

「ご苦労、後はこちらでやりますから下がって構いません」

女中はこちらに一礼した後来た道に戻っていった。

「御三方中に御入りください」

恭子を先頭に佳織、春水と続き部屋に入る。

部屋の中には6人いたが正面の椅子には少女が座わっておりその両隣に佳織と同じ赤い軍服をきた女性士官が立っていた。

春水から見て右側に巖谷中佐がおり、左側には恭子と同じ蒼い軍服の男性士官とその護衛であろう赤い軍服の男性士官が立っていた。

部屋の中心にまで進んだ後恭子が一礼をし、少女に話しかける。

恭子

「お久し振りです殿下。今日は会談に応じて頂き感謝致します」

殿下

「お久し振りです崇宰殿」

佳織は恭子の少し後ろで背筋を伸ばし立っていたが顔を見る限り緊張しているのがよくわかる。

恭子

「今日会談を開いたのは日本帝国の未来に関わる御方をお連れいたしました」

そういった後、恭子は春水の方を向き殿下に春水を紹介した。

恭子

「こちらは霧島春水殿。BETAと戦うため帝国に助力を申し込んできました」

春水は殿下に向かつて一礼し挨拶をした。

春水

「御初御目にかかります。自分は霧島春水と申します」

挨拶したあと殿下が春水に話しかけてきた。

殿下

「初めまして霧島殿。私は煌武院 悠陽（こうぶいん ゆうひ）と申します。私の両隣にいるのは月詠 真耶（つくよみ まや）並びに月詠 真那（つくよみ まな）中尉です。崇宰殿がいま帝国の未来に関わる御方と申しましたがいったいどういふことでしょうか」

真耶、真那

「よろしく」

恭子

「それに関しては私から申し上げます。霧島殿は助力を帝国に求める際、自分の持っている技術の一部と兵器の設計図のデータ並びに兵器のサンプルを譲渡してきました。

巖谷中佐、皆さんに資料を」

巖谷は領き5人に資料を渡していく。

資料を受け取った5人は資料を読んでいくにつれ表情が変わり、驚愕する者、半信半疑の者とわかれた。

恭子

「それに書かれている兵器ですが私や巖谷中佐、後ろに控える如月中尉は実際に見ております。兵器の武装並びに性能は全てにおいて既存の戦術機を凌駕しています」

悠陽

「実際にこんな兵器が存在しているのですね。成る程、

確かに帝国の未来の為と言われるだけのことはありますね」

殿下が資料から目を離し、顔を上げると両隣の中尉達が殿下に意見を述べていた。

真耶

「しかし殿下そう簡単にこの者を信用してはいけません」

真那

「そうです。我らを油断させ帝国に仇をなす者かもしれません」

悠陽

「しかし真耶、真那これ程の兵器を渡してまで帝国に仇をなすメリットは無いと思うの

ですが」

真那、真那

「しかし……」

「ひとつよろしいか」

殿下が中尉達と話し合っていると、左側にいた蒼い軍服の男性が声をあげた。

崇継

「御初御目にかかる霧島殿。私は斑鳩 崇継（いかるが たかつぐ）日本帝国斯衛軍に所属している。階級は少佐。五撰家の一角、斑鳩家の当主でもある。隣にいるのは私の護衛の真壁 清十郎（まかべ せいじゅうろう）少尉だ」

春水は崇継並びに清十郎に頭を下げる。

崇継

「勿体ぶるのも面倒だから率直に聞くが君はいつたい何者で、こんなものをいつたいどこで手に入れたんだい？」

崇継の言葉を聞き殿下、真耶、真那、清十郎の視線が春水に集まる。皆、春水を見極めようとしていた。

春水

「まあ、そうですね。その疑問はごもつともですよね。崇宰さんに巖谷中佐、如月さん

達にも聞かれましたから皆さんにも説明いたします」

春水は自分がこの世界に来た経緯を話した。

春水

「と、まあそんなところですよ。なにか質問はありますか？」

少しの沈黙の後、崇継が春水に話しかける。

崇継

「この世界とは違う世界の人間なら何故日本に助力を求めた？ 言うてはなんだがもつと他にも国はあったはずだ。これだけの兵器のデータがあるのだからどこにでもいけただろう」

春水

「何故って言われても………やっぱり俺自身世界が違っても日本人ですから日本を守りたかっただけですよ」

春水の言葉を聞き崇継は声をあげて笑った。

春水は何故笑っているのかわからず回りを見ると恭子に佳織、巖谷中佐そして殿下までも笑っていた。

真耶、真那の兩名は少し呆れている感じだった。

崇継

「くくく………殿下、私斑鳩宗継はこの者霧島春水殿を信用し助力しても構わないと申し上げます」

悠陽

「はい、私もそう思います。真耶、真那構いませんね」

真那

「はい、問題ないかと」

真那

「そうですね、疑う必要は無いと思います」

悠陽

「霧島殿」

春水

「はい」

悠陽

「私煌武院悠陽は政威大將軍の名において日本帝国が貴方に助力することを誓いましょう」

悠陽の言葉を聞き春水は悠陽に頭を下げた。

春水

「ありがとうございます」

恭子は春水に近づき賛辞を述べた。

恭子

「霧島さん、おめでとうございます。これで帝国との協力という目標は達成しましたね」

春水

「はい、崇宰さん達のお陰です」

春水が恭子と話していると巖谷が殿下に話しかけた。

巖谷

「殿下、霧島君が帝国内で自由に動けるようにしたほうがよろしいと思うのですが」

巖谷の言葉を聞き皆の視線が巖谷と悠陽に集まる。

悠陽

「そうですね。中佐なにか妙案があるのですか？」

巖谷

「はい。霧島君には帝国斯衛軍に入ってもらいます。しかし、軍に入るとしても命令系統は軍には置かず殿下直属の独立部隊を率いる者としておきます」

悠陽

「そうですね。その方がいいかもしれません。只いきなり直属となりますから軍上層部

から反発があるかもしれませんね」

巖谷

「はい。しかし、独立部隊にしなければ上層部から技術を並びに兵器も全て要求されるかもしれないし、最悪霧島君が帝国から離れるかもしれない。こう言つては失礼だが霧島君の兵器が他国に渡つたら帝国が危険にさらされるかもしれません。あくまで仮定の話ですが」

崇継

「いや、あり得ない話しでもないだろう。殿下私も巖谷中佐の意見に賛成です」

悠陽

「霧島殿はどうしますか？」

悠陽に訪ねられ春水は答える。

春水

「自分は構いませんよ。軍に入るなら元々独立部隊にしてもらえるよう頼む予定でしたし。只どこか基地を一つ頂けませんか」

悠陽

「基地をですか？それはいったい何故？」

春水

「自分の拠点を確保したかったのと、いい加減地に足をつけたかったもので」

悠陽

「わかりました。では霧島殿を帝国斯衛軍への入隊並びに私政威大將軍直属の部隊の隊長に任命します。皆宜しいですね」

春水以外全員頷いた。

悠陽

「階級や基地は後日お知らせ致します。話しは終わりますが、他に何かありますか？」

春水

「一つよろしいですか？」

悠陽

「なんででしょうか」

春水に皆の視線が集まる。

春水

「まず殿下に献上するものがありまして、つきましては明日の正午に舞鶴基地に殿下に来てほしいのですが」

悠陽

「構いませんけど基地に行くとか何かあるのですか？」

春水

「先程資料にのつていた兵器並びに戦艦を1艦献上します」
全員が驚いた顔をしていた。

恭子達も何も知らされていなかった為大変驚いていた。

悠陽

「わかりました。明日の正午ですね」

春水

「はい」

悠陽は真耶に合図を送り、真耶が会談の終わりを告げる。

真耶

「これにて会談を終了致します」

恭子、佳織が殿下に一礼したのを見て春水も一礼し、恭子達と共に部屋から出る。

部屋から出ると女中があらわれ御所の外に停めてある車まで案内されお礼を言ってから崇宰邸へ返る。

車内にて恭子達が話しかけてきた。

恭子

「先程も言いましたが、霧島さん、おめでとうございます」

春水

「ありがとうございます」

佳織

「あんなに簡単に決まるとは思わなかったなあ」

春水

「そうですね。もつと色々言われると思ってました」

佳織

「でもまあ、戦う理由があれだったからな」

恭子

「霧島さんの本心を聞いたのですから問題ないでしょう」

春水

「はあ、よくわかりませんが」

恭子

「今の世界で霧島さんみたいに行動できる人はそういませんからね」

暫く車は走り崇宰邸に到着し恭子達に帰ることを告げると恭子達が話しかけてきた。

恭子

「明日は訓練はありませんよね」

春水

「はい、日曜なので唯衣ちゃん達には休日を満喫してもらおうかと思ったのと、元々明日献上品を贈る予定だったので」

恭子

「では私は明日基地に同行致します。如月中尉はどうしますか？」

佳織

「御供致します」

春水

「いえ無理しないでくださいね。せつかくの休日なんですから」

恭子

「大丈夫です。それに私も献上される戦艦を見てみたいですから」

春水

「わかりました。では明日の午前10時に迎えに来ますね」

恭子、佳織が領いたのを確認し、崇宰邸を後にしてプロレマイオス2に帰還。

自室にて春水は当初の目的をようやく果たしこれから忙しくなるなど思いながら眠りについた。

9 話

次の日約束した時間に春水は崇宰邸へ恭子と佳織を向かえに行きプロトレマイオス2へ。

正午まで時間はまだ早い舞鶴基地へ向かう。

食堂にて恭子が今日の予定を聞いてくれたので、春水は2人に説明する。

恭子

「今日は舞鶴基地にて殿下への献上品である戦艦を贈ることですが、ほかには何かありますか？」

春水

「ええ、戦艦を献上したら殿下達を案内するために艦の中に入ります。格納庫で機体を見た後、殿下達にはシミュレーターを体験してもらい、体験した後2人には殿下達の前でいつもの訓練してもらいます」

春水の説明を聞き、佳織が焦った様子で話しかけてくる。

佳織

「で、殿下の見ている前で…く、訓練するのか…」

春水

「はい、そうですよ」

佳織

「その訓練は…その…光線級もいるのか…」

春水

「もちろんいますよ。訓練ではちゃんとレーザーを回避してくださいね」

春水の言葉を聞き、佳織が固まっていると代わりに恭子が話してきた。

恭子

「何故私達なのでしょう？霧島さんでは駄目なのですか？」

春水

「俺が訓練をやるより、殿下達が知っている2人が避けられないと言われているレ-

ザーを避ける所を見せたほうが衝撃がでかいかと思ひまして」

予定を確認して暫くするとアプロディアが基地にそろそろ

到着することを告げる。

アプロディア

「マスター、そろそろ舞鶴基地に到着いたします」

春水

「まだ約束の時間まで早いから、そのまま基地上空を通過して海上に出てくれ。海上に出てから艦首を基地に向けて着水してくれ」

アプロディア

「了解致しました」

アプロディアへ指示した後春水は恭子達に時間までどうするかたずねる。

春水

「さて約束の時間までまだ余裕がありますけどどうしますか？」

春水の言葉を聞き、佳織が直ぐ答える。

佳織

「ギリギリまで訓練する。殿下の前で無様を晒したくはないからな」

恭子も頷き、春水に話しかける。

恭子

「そうですね。私達は訓練に向かいます」

春水

「わかりました。では約束の15分前になったら呼びにいきます」

恭子

「わかりました。では中尉行きましょう」

佳織

「はい」

恭子達が食堂から出ていった後、春水はアプロディアに頼んで食堂のモニターに恭子達全員の戦闘記録を表示させ、得意不得意をグラフにする。

春水

「崇宰さんは全体的に高い数値だな。操縦技術、射撃、格闘、機動ともに申し分無いし。如月さんは崇宰さんより全体的に少し低いけど格闘はあまり大差ない。唯衣ちゃん達はまだまだ低いけどまだ乗り始めたばかりだしこれから伸びるだろうから問題ないかな」

モニターを見ながら春水は思考し約束の時間まで時間が過ぎていった。

約束の15分前になりアプロディアが春水に話しかける。

アプロディア

「マスター、そろそろ時間です」

春水

「うん……もうそんなに時間がたったのか。アプロディア、崇宰さん達に訓練終了を告げて身支度の準備を。俺もシミュレータールームに向かうから合流後、小型艇で基地に向かう」

アプロディア

「了解致しました」

春水はモニターを消し食堂を出て恭子達の元へ向かう。

到着後、恭子達の身支度に少し時間がかかったが3人で格納庫に向かい小型艇に乗り込む。

席に座って恭子が春水に話しかける。

恭子

「霧島さん、小型艇で向かうのに基地へ事前に連絡したのですか？」

春水

「いやまだです。殿下達が到着してから連絡する予定でしたから」

恭子

「それは何故です？」

春水

「殿下に俺が保有するこの艦を見せるためですかね。今現在トレミーは光学迷彩を使用していますからかまだ基地にバレていないと思います。まあバレていたら基地から戦術機が来ていてもおかしくありませんし」

恭子

「ということは連絡後に光学迷彩を解除するのですか」

春水

「はい。解除後少しトレミーで基地に近付いたのち小型艇で基地に向かいます」

佳織

「基地に直接この艦で向かえばいいんじゃないのか？」

春水

「この艦の外観は見せても構いませんけど殿下達を乗せる気はまだ無いです」

恭子

「……わかりました。では基地への連絡は私が致しましょう。霧島さんが連絡しても基地司令が許可するかわかりませんし」

春水

「すいません。実は元々崇宰さんに連絡して貰うつもりでした」

佳織

「どういうことだ？」

春水

「昨日崇宰さん達が献上する戦艦を見るために同行すると聞いたので、じゃあ殿下が基地についてから連絡していきなり基地近くに艦を表して驚かせようと考えてました」

それを聞き2人の呆れている視線を感じた春水はアプロディアに基地への連絡を繋ぐようすぐに指示を出した。

この日舞鶴基地は緊張に包まれていた。

基地入り口で見張りをしていた兵士から政威大將軍煌武院悠陽殿下並びに五摂家斑鳩崇継少佐が護衛を連れて表れたと基地司令官に連絡があつたことで基地にいる全兵士にたいして厳戒体制の指示が告げられていた。

殿下達は基地兵士の案内で基地の応接室へ。

応接室に殿下達が入つてすぐに基地司令官が入つてきた。

司令官は殿下達に敬礼をした後、殿下達が何故舞鶴基地に来られたのか聞いた。

司令官

「殿下並びに斑鳩様まで本日はいったいどうなされたのですか？」

崇継

「今日この基地に来たのは、我ら帝国へ協力してくれる者から殿下へ献上品がこの基地に贈られることになっているんだが、ご存じなかつたか」

司令官

「そうなのですか。いえ存じておりません」

崇継は時間を確認後殿下を見て、殿下が領いたのを確認し司令官に話しかける。

崇継

「もうじき連絡があると思うのでそれまで私達はここで待たせてもらおう」

司令官

「わかりました。もうじき正午ですので私もここで待ちましょう」

暫くして応接室の扉を叩く音がし、司令官が中に入るよう告げる。

「お取り込み中失礼いたします」

司令官

「どうしたなにかあったのか？」

「はっ、たつた今崇宰様から連絡がありまして、殿下達に基地の海側まできてほしいとのことです。そ、それと連絡後海上に所属不明の船が突然現れました。尚、所属不明の船は現在基地に向け移動中であります」

司令官

「所属不明の船だと！直ちに戦術機を向かわせろ！」

斑鳩

「待ちたまえ司令官」

司令官

「し、しかし」

斑鳩

「船が現れたのは恭子君から連絡があつた後であり、しかも殿下や私達に海側に来るようにと言っている」

殿下

「おそらくその船は霧島殿の船なのでしょう」

斑鳩

「はい、私もそう思います」

司令官

「その霧島と言うものが帝国の協力者なのですか？」

殿下

「はい。では皆様崇宰さんから連絡があつた海側へ向かいましょう」

司令官

「わかりましたが念のため戦術機の発進準備はしておきます。それとこちらからも護衛として兵士をつけます」

「殿下達は恭子から連絡があつた海側へ基地の司令官並びに兵士達も引き連れ大所帯で向かった。」

恭子が基地に連絡してプロレマイオス2で基地に少し接近後小型挺を発進。基地兵士達がこちらを警戒してはいるが、攻撃許可は出ていないようである。春水は少し安堵した。

小型挺を基地に着陸させ春水達は小型挺から降りる。

春水が先頭で降りてきたので兵士が小銃を構えたが、その後ろから恭子が降りてきたので構えを解いた。

恭子が近くの兵士に訪ねる。

恭子

「殿下は基地に来ていますか？」

「は、はい。た、只今、基地司令と共にこちらにむ、向かっております」

恭子

「そうですか、では暫くここで待たせてもらいます」

恭子に話しかけられた兵士の言動を聞いて、春水は佳織に訪ねる。

春水

「あの兵士凄く緊張していますけど、どうしたんです？」

佳織

「いや、あれはしょうがない。あの兵士はおそらく一般武家出身者だろうから緊張するのも無理はない。むしろお前のほうがおかしい」

春水

「いや俺この世界の生まれじゃないんでおかしいと言われても……」

暫くして春水達の前に車が数台止まり中から沢山の兵士が降りてきた。降りてきた兵士達は殿下や崇継を守りながらこちらに近づいてきた。

春水達も殿下達に近づくと殿下達と一緒にいた兵士が回りに指示を出して春水達と殿下達の回りを兵士達で囲んだ。

囲まれたことに春水が疑問に思っていると殿下が春水に話しかけてきた。

殿下

「こんにちは霧島殿」

春水

「こんにちは殿下。それに皆さんも本日は来ていただきありがとうございます」
春水は殿下達に一礼する。

殿下

「いえ、構いませんよ」

崇継

「気にしないでくれ。で、早速本題に入ろう。あまり時間がないのでね。霧島殿が献上する戦艦というのはあれかい？」

春水は首を振り崇継に話しかける。

春水

「いえ違います。あれは俺の艦で献上する戦艦ではありません。今から呼びますので少しお待ちを」

春水は通信機でアプロディアに指示を出す。

春水

「アプロディア、アークエンジェルを海上まで浮上開始。海上に出たら基地に向け移動してくれ」

アプロディア

「はい、マスター」

春水は殿下達に海を見るように告げる。

春水

「今から浮上してきますから海を御覧ください」

殿下達が見ているなか海上にアークエンジェルが姿を現し基地に向け移動してくる。

基地の人間や殿下達が驚いているが、更に驚かせるため春水がまた指示を出す。

春水

「アプロディア、海上からアークエンジェルを浮上させてくれ」

春水の言葉を聞き殿下達はアークエンジェルを注視した。

春水の指示を受けたアプロディアはアークエンジェルを空に向け浮上させる。

空に飛ぶアークエンジェルをみてあちこちから声上がるが春水は気にせずにアーク

エンジェルを見る。

基地に近づいてきたので着水を指示し、そのまま基地へ接岸させる。

接岸後、春水は殿下達に向け話しかける。

春水

「これが殿下に献上いたします、強襲機動特装艦アークエンジェルです」

10話

春水

「では艦の中を案内しますから行きましようか」

春水の言葉を聞き、呆然としていた殿下達や基地兵士達が我に返る。

そんな中、崇継が春水に質問する。

崇継

「戦艦が空を飛ぶとは……ということは彼処に止まっている君の母艦も飛べるのかい？」

春水

「ええ」

崇継

「凄い技術だな。この技術が一部とはいえ帝国にもたらされるのだから君には感謝しかないよ」

春水

「一部とはいえそう言ってもらえるだけでもよかったです。では艦の中に行きましょ

う」

崇継

「ああ」

春水達がアークエンジェルに向け歩き始めてすぐに司令官が止めにかかった。

司令官

「殿下お待ちください！それに斑鳩少佐も！」

悠陽

「どうされましたか？」

司令官

「殿下、この者は一体何者なのですか！こんな得体の知れない者についていき、殿下の御身にもしものことがあつたらどうするのですか！」

崇継

「心配はいらない。霧島殿は殿下に危害をくわえたりしないさ」

司令官

「何故そう言いきれるのですか！」

崇継

「それは……」

崇継が説明しようとしたところ殿下が手で静止させ司令官に話しかける。

悠陽

「御下がりなさい。霧島殿は信用にたる御方ですので大丈夫です。それとも私の言葉は信用出来ませんか？」

司令官

「くっ……わかりました。出すぎた真似を致し申し訳ありません」

悠陽

「では霧島殿行きましょう」

殿下に促され春水は皆を連れアークエンジェルへ。

アークエンジェルに近づきアプロディアに指示を出す。

春水

「アプロディア、ハッチを開けてくれ。で、俺達が入ったらハッチを閉じて誰も入れないようにしてほしい」

アプロディア

「了解致しました。ではハッチを開けます」

艦の中に入った後春水は艦橋に案内した。

艦橋に入ると殿下達は見たことない機械を見いつている

春水

「ここはこの艦の艦橋になります。艦長の指示を艦内に伝えたり、艦の操舵や索的、MS発艦や格納庫への連絡、MSへの通信に艦の武装を使い攻撃指示などをします。あと艦長席の後ろに下に降りる階段がありそこで攻撃指示を受け艦の武装を使い攻撃します」
殿下は回りを見ていて誰もいないことに気づき春水に話しかけた。

悠陽

「この艦には誰もいないのですか？先程誰かに指示を出していましたが」

春水

「ええ、この艦に人はいません」

悠陽

「ではいったい誰がハッチを開けたのですか？」

春水

「今からご紹介します。目の前の大型モニターを御覧ください。アプロディア、姿を」
大型モニターにアプロディアが姿を現す。

アプロディア

「皆様御初御目にかかります。私はアプロディア、マスターこと霧島春水のサポートを致しています。どうぞよろしくお願いいたします」

悠陽

「私は煌武院悠陽と申します。こちらこそよろしくお願いいたします」

崇継

「私は斑鳩崇継。よろしく頼む。霧島殿彼女は一体……それに恭子君達も驚いていないようだが……」

春水

「アプロディアは人工知能つまりはAIです。崇宰さん達が驚かないのはすでに知っているからです」

崇継

「そうか、そういうえば君を殿下に紹介したのは恭子君だったね。すでに知っていてもおかしくはないか。それにしても人工知能か……まさかそんなものが存在しているとは」
春水はアークエンジェルに入る前にあつた基地司令官とのやり取りを殿下達に聞くことにした。

春水

「先程の指揮官らしき人とのことはよかったですか？」

崇継

「問題はないだろう。彼らは殿下の御身を思つてのこと。只、最近軍の上層部はあまり

聞く耳を持たなくなつてはきているがな」

恭子

「崇継殿、やはり上層部の者達は……」

崇継

「ああ、国を守るより自己保身にはしつている者が出てきている状態だ」

悠陽

「私の力が弱いばかりにあなた達に苦勞をかけて申し訳ありません」

恭子達は殿下の言葉を聞き、首を横に振る。

恭子

「大丈夫ですよ殿下。ここに居る者達は殿下の味方ですから。それに……」

恭子は春水に視線をうつし、殿下も春水を見る。

悠陽

「……そうですね。皆これからも頼りにしています」

春水

「出来る限り頑張ります。では次は格納庫へ行きましょう」

格納庫に着き恭子と佳織以外は初めて目にする為やはり驚いていた。

パウについて崇継や真耶、真那達斯衛の者達から色々聞かれたが一通り説明した後

シミュレーター室に行くことを殿下達に告げる。

春水

「最後にシミュレーター室に行つて斑鳩少佐、月詠中尉達、真壁少尉にバウを操縦して戦術機との違いを体験してもらいます」

春水がシミュレーター室に行くと言った瞬間、恭子と佳織の表情が緊張している感じにかわつた。

シミュレーター室に入る前にパイロットスーツに着替える為、先に春水と崇継と清十郎が更衣室に入る。

中に入り、春水は2人にパイロットスーツを渡し着方を教える。色はちゃんと蒼と赤尚アークエンジェルのパイロットスーツは春水達と違い、

UC時代ネオ・ジオン残党のパイロットスーツにしてある。

着替えが終わりに次に恭子と佳織、真耶と真那が中に入る。

4人の着替えを待つ間に殿下と崇継がスーツのことで話し合っている。

悠陽

「強化装備ではないのですね。斑鳩殿着た感じはいかがですか？」

崇継

「着た感じは全く違和感はないですね。むしろ軽くて動きやすい。真壁はどうだ？」

清十郎

「強化装備に慣れていているためかちよつとしつくりこないですね。慣れれば問題ないかと」

悠陽

「霧島殿このスーツは強化装備と何か違うのですか？」

春水

「違いは……対G緩和でしょうね。まあシミュレーターではあまり関係ありませんが」

雑談していると更衣室から4人が出てきた。

殿下が恭子と佳織のスーツが崇継達と違うことについて春水に訪ねる。

悠陽

「崇宰殿達は斑鳩殿達とスーツが違うのですね」

春水

「斑鳩少佐達のスーツは日本帝国に進呈するもので、崇宰さん達のは独立部隊用で他の部隊には使われません。性能は変わりませんから御安心を。じゃあシミュレーター室に入りましょう」

シミュレーター室に入り崇継達をシミュレーターへ。

春水は殿下、恭子と佳織に斯衛の人達と正面のモニターを見る。

春水

「では皆さんシミュレーターを起動します。起動後皆さんのタイミングで始めてくだ

さい」

崇継

「了解した」

春水

「では開始します」

モニターに4機のバウが出現。

先ず清十郎が続いて真耶、真那とバウの操縦を始めるが、

初めて動かしした恭子達と同じように転倒する。

3機が転倒したのを見て崇継は慎重にバウを動かし転倒は何とか避けたが動きが鈍くよろづついている。

悠陽

「真耶達が転倒するなんて……それだけ操縦が難しいということですか」

春水

「戦術機とはOSが全く違いますからしょうがないかと」

30分後シミュレーターを停止し崇継達が降りてくる。
慣れない操縦で皆少し疲れた表情をしていた。

春水

「お疲れ様です。操縦してみてどうでしたか」

崇継

「こんなに難しいとは」

真耶

「これは自在に動かせるようになるには時間がかかるな」

真那

「戦術機とは全然違う」

清十郎

「……転倒するなんて」

春水

「初めてですからしょうがないですよ。では次は崇宰さんと如月さんにBETAとの戦
闘訓練をしてもらいます。崇宰さん、如月さん準備をお願いします」

恭子と佳織は頷いた後シミュレーター機に入る。

春水はアプロディアに訓練内容を伝える。

春水

「アプロディア、今回の訓練は戦車級300突撃級200要撃級200光線級20で頼む」

アプロディア

「了解致しました」

モニターに大量のBETAが出現し、殿下達の目付きが変わる。

春水

「崇宰さん如月さん準備はいいですか？」

恭子

「ええ。準備は出来ています」

佳織

「いつでもかまわない」

春水

「では訓練を開始します」

BETAの大軍の前に2機のバウが出現。

出現と同時に突撃級が突進を開始。続けて戦車、要撃級も2機に向けて移動を開始。対して恭子と佳織は右側へ回り込むように移動を開始。

突撃級との距離が近づいたのを確認し、恭子と佳織がビームライフルを連射モードで射撃を開始。

突撃級の装甲を容易く貫き数を減らしていく。

崇継

「あれが光学兵器……突撃級の装甲をあんなに簡単に撃ち抜くとは」

数を減らすが突撃級を倒しきれず余裕があるうちに2機がスラスターを吹かし空へ。

真耶

「な、馬鹿な光線級がいるんだぞ」

真那

「何故そんなことを……」

高度を上げてすぐ光線級から2機へ向けてレーザーが発射される。

モニターを見ていた殿下達は撃墜される光景を想像した。

しかし、2機は殿下達の予想を裏切りレーザーを回避し、そのまま光線級へ向け突撃を開始。

清十郎

「嘘だろ……光線級のレーザーを避けた……」

正面から襲ってくるレーザーを避けながらシールドのメガ粒子砲を光線級へ向け発

射。光線級が光に飲まれ消滅すると同時に着弾の余波で回りの光線級も次々と撃破していく。

生き残った光線級が2機に向けレーザーを放つがスラスターを全開に吹かしてレーザーが当たる前にその場から離脱。

ライフルの射程圏内に光線級が入りすぐに全滅させる。

全滅後すぐに残りのBETAに向けミサイルを発射し、再度空へ。

光線級がいなくなり空中からビームライフル、グレネード、メガ粒子砲を打ち続け数十分後、原形をとどめていないBETAで辺りが埋め尽くされ訓練が終了した。

恭子、佳織が訓練を終えて機械から降りてこちらに向かってくるが、殿下達は先程の光景が余程衝撃だったのか呆然としていた。

そんななか2人に春水が話しかける。

春水

「お疲れ様でした。あの戦い方は午前中の訓練で考えたのですか？」

恭子

「はい。私達はまだレーザーを完璧には避けられませんが、推進剤を気にせずスラスターを全開にすれば当たらないのではと思いました」

佳織

「それに殿下が見ているのだからそこまで時間を使うような訓練にはならないだろうと恭子様と話し合ったんだよ。だから推進剤は気にしないでやることにした」

春水

「なるほど、確かにそれが今できる最善かもしれないですね」

春水達が話し合っていると衝撃が抜け落ち着いた殿下達が春水達に話しかけてきた。

悠陽

「まさか2機だけであれだけのBETAを倒すなんて……」

真耶

「それに光線級のレーザーを避けながら反撃まで……」

真那

「数多の衛士の命を奪ったレーザーを避ける場面を見られるとは……」

崇継

「それほどまでにあのバウの機体の性能が高いということなのだ……」

清十郎

「それに戦術機に比べて武装が豊富ですよ……」

春水

「バウは今巖谷中佐が帝国で量産するためサンプルのバウとデータを見ながら開発中で

す」

恭子

「操縦は大変ですがバウが量産され全ての帝国衛士に配備されれば帝国はBETAに勝つことが出来るかもしれません」

佳織

「それに強化装備を必要としないから強化装備の適正がなくても乗ることが出来るのも大きいだろうな」

「思い思い意見を言い合っていたが、春水はそろそろ艦から降りることを殿下に告げる。」

春水

「そろそろ艦からでましようか。基地司令官が心配していると思いますし、あまり遅くなる前に殿下も御所に御戻りしたほうがいいと思います」

悠陽

「確かにそうですね。あまり心配させるのも悪いでしょうからね」

春水

「では崇宰さん達が着替えを終わり次第艦から降りましょう」

「シミュレーター室を出て恭子達を先に更衣室へ。」

待つてる間に崇継が春水に話しかける。

崇継

「霧島君ちよつといいかね」

春水

「どうしましたか、なにか問題がありましたか」

崇継

「いや、問題はないよ。只一つ御願いがあつてね」

春水

「御願いですか？」

崇継

「ああ、頼みと言うのはバウを数機我が部隊へ頂けないだろうか」

春水

「バウを？別に構いませんよ」

崇継

「すまない。恩に着る」

しばらくして恭子達が更衣室から出てきたので入れ替わりで崇継、清十郎が更衣室へ。

2人はすぐに出てきたので、春水は殿下達を連れアークエンジエルを降りた。

外には見張りの兵士が数名立っており降りてきたことに気づき連絡をしている。

春水は降りてすぐにアプロディアに連絡をする。

春水

「アプロディア、トレミー内のバウを全機舞鶴基地へ向けて射出して、アークエンジエルの近くに着陸させてくれ」

アプロディア

「バウを全機射出して問題はありますか」

春水

「大丈夫だろう。このバウは斑鳩少佐に全機贈る」

アプロディア

「了解致しました。バウを射出致します」

春水とアプロディアの会話を聞いていた崇継は驚いていた。バウを欲しいとは言ったがまさかこんな早く渡されるとは思わなかったからだ。

プロトレマイオス2からバウが射出されアークエンジエルの近くに整列するように並べられていく。

全部で8機のバウが崇継へ贈られた。

兵士から連絡を受けた司令官が現れ殿下達と話していたが、春水は殿下に話しかける。

春水

「殿下御話し中申し訳ありません」

悠陽

「どうしましたか、霧島殿」

春水

「そろそろ俺は基地から離れようと思います。母艦をいつまでも晒すわけにもいきませんし」

悠陽

「そうですか、わかりました。霧島殿今日はありがとうございます」

春水

「いえこちらこそ突然の申し出でしたのに来ていただきありがとうございます」

崇継

「霧島殿、あの機体は大切にさせてもらうが君の艦の戦力が減ったのではないのか？大丈夫なのかい？」

春水

「確かに今艦の中には俺の機体しかありませんから明日にでも補充の為に一度拠点に帰ろうかと思えます」

悠陽

「拠点ですか。それはどこにあるのですか？」

春水は指を空に向けてから

春水

「宇宙ですよ」

悠陽

「…宇宙…ですか」

春水

「はい」

崇継

「宇宙に拠点があるとは…君には驚かされてばかりだな」

恭子

「霧島殿いつ頃出発するのですか？」

春水

「今日の夜には出発します。帰ってくるのは3日後ですね」

恭子

「そうですか」

「そういうと恭子は殿下に告げる。」

恭子

「殿下私崇宰恭子は霧島殿の拠点にお供したいと思います。つきましては私の他に数名連れていくことをお許しく下さい」

悠陽

「……そういうと思いました。わかりました、許可します」

恭子

「ありがとうございます。……如月中尉聞いていましたね」

佳織

「はい、お供致します。残りの者はあの者達ですね」

恭子

「ええ、そうです」

「恭子は春水に向き直り話しかける。」

恭子

「と云うことで霧島さんよろしくお願いいたします」

春水

「え、あ、はい」

春水はまさかついてくるとは思っていなかったため、返事が曖昧になってしまったがな
なってしまった以上しようがないかと思うことにした。

1 1 話

崇継

「話中すまないが、霧島君ちよつといいかな」

崇継が基地司令を連れて春水に話しかける。

春水

「どうしましたか？」

崇継

「先程譲ってもらった機体なんだが、基地の格納庫を1つ借りたのでそちらに移しても
らいたいのだが。我々で操縦出来ればよかったのだが……」春水はシミュレーターでの事を思い、転倒してもし壊れでもしたらと考えたのだろ
う。

春水

「わかりました。格納庫はどこですか？」

司令官

「格納庫はあそこだ」

司令官が1つの建物を指差した。

春水

「ありがとうございます。では機体を移動させますから皆さん離れてください」

バウを近くで見っていた兵士達を退去させた後、春水はプロディアに全機移動するよう指示をだした。

全機モノアイが光りホバー走行を開始。

格納庫に近づくと1列に陣形を変え格納庫に入っていった。

崇継

「ありがとう。我々もあれを自由に動かせるようにこれから毎日訓練する。それに、あの機体を分析すれば開発中の試験機に応用出来るだろうから」

春水

「訓練頑張ってください。応用するのでしたら巖谷中佐と連絡を取り合ったほうがいいと思います。あちらは既に分析を始めていますから」

崇継

「そういえばそうだったね」

春水は殿下達に向き直り話しかける。

春水

「ではそろそろ基地から離れます。宇宙に行くのに色々準備がありますので」
悠陽

「はい。霧島殿、宇宙から戻りましたら連絡をもらえますか。その頃には階級や基地を決めておきますので」

春水

「わかりました、戻り次第連絡致します。では皆さん失礼します」

春水が小型艇に向かって歩き、恭子、佳織が殿下達に別れを告げ春水の後を追った。

小型艇に乗りプロトレマイオス2へ帰還後、海面から浮上後光学迷彩を使用して基地を離れ崇宰邸へ向かう。

艦内にて春水は恭子に話しかける。

春水

「宇宙に行く準備ですけど、パイロットスーツ等があるので着替えぐらいで大丈夫です。それと唯衣ちゃん達への連絡をお願いします。」

恭子

「わかりました。何時くらいに当家に来られますか？」

春水

「とりあえず夜8時に向かいます。それで準備は間に合いますか？」

恭子

「はい。大丈夫です」

春水

「如月さんもそれでいいですか？」

佳織

「ああ、問題ない」

崇宰邸へ到着し2人を送った後、太平洋へ

到着後潜行し艦を停泊させ春水はアプロディアに話しかける。

春水

「アクシズのMS、戦艦の生産状況は今どれくらいだ」

アプロディア

「現在量産型バウ、ドライセン、ガ・ゾウム40機ずつでムサイ改は10艦生産が完了しております」

春水

「そうか、じゃあMSを一時生産中止して別のMSを頼む。戦艦はそのまま構わない」

アプロディア

「何を生産するのですか？」

春水

「バウの改修型のバウ袖付きを7機で、各員の色も変えておいてくれ。生産終了後一時中止を解除する」

アプロディア

「了解致しました」

約束の時間に崇宰邸に向かい恭子達を乗せ再度太平洋へ向かう。

潜行後日本から離れ日本とハワイの中間で停泊し、全員パイロットスーツに着替えるよう指示。

唯衣が春水に宇宙に向かう方法を聞く。

唯衣

「恭子様は宇宙の拠点に向かうと聞きましたが、どうやって向かうのですか？後、格納庫にバウがありませんでしたか」

春水

「格納庫のバウは斑鳩少佐に全機譲つたよ。宇宙へ向かう方法は今から見せるよ」

春水は恭子達に席につきベルトで身体を固定するよう告げ、アプロディアに指示をだす。

春水

「皆さんベルトでしっかりと身体を席に固定してください。これから宇宙に向かうにあたり身体にGがかかります。宇宙に出たら合図があるまでベルトを外さないで下さい。じやあ始めます。アプロディア、艦首を45度上向きに固定後艦の後方へ戻って来るように魚雷発射、艦に被害が及ばない位置で起爆後爆風を利用して艦を最大船速で空へ」

アプロディア

「了解致しました」

プロトレマイオス2が傾いていき準備が完了する。

アプロディア

「マスター準備完了しました」

春水

「よし始めてくれ」

魚雷が発射されある程度進んだ後こちらに向かって折り返してくる。春水は起爆する前に艦の移動を指示。

魚雷が起爆して艦に衝撃がくると同時に春水はアプロディアに指示する。

春水

「TRANS—AM発動と同時にGNフィールドを艦首に展開」

プロトレマイオス2が赤く光り緑色の粒子が艦首に溢れる中海を飛び出し空を突き進む。

恭子達がGに耐えながら時折苦悶の声が出ているが春水は再び宇宙に來れる喜びを感じていた。

数十分後揺れが収まりプロトレマイオス2はアクシズへ向け移動を開始。

ブリッジのモニターにはあたり一面星が輝く宇宙が映し出されていた。

恭子達が景色に見とれている中春水は恭子達に話しかける。

春水

「皆さん大丈夫ですか？気分が悪くなったりしてませんか」

恭子

「私は大丈夫です。皆はどうですか？」

佳織

「なんとか大丈夫です」

唯衣が上総達と話して状態を確認。

唯衣

「私達も大丈夫です」

体調が悪くなっている人がいないことを確認してから春水がベルトを外すよう恭子

達に告げる。

春水

「ではベルトを外してください」

恭子達がベルトを外し春水の指示を待つ。

春水

「では立ち上がってください。スーツの足の裏に微弱ですが磁石を入れてあるので問題ないはずですよ」

恭子達が立ち上がった後、春水は宇宙での移動方法を教える。

春水

「艦内を移動する場合床や壁、天井を軽く足で蹴ったり手で押したりして移動します。今見本を見せます」

春水は床を蹴り上へ、天井を手で押し元の位置に戻る。

春水

「では体験してみてください。只勢いよく蹴ったりはしないでください。慣れないと危ないので」

恭子達が練習を始める。

無重力を初めて体験する為苦戦してはいたが、楽しんでいるようだった。

しばらくして慣れた恭子達を部屋に案内する。

春水

「明日には拠点につきますから今日は疲れたでしょうから早めに休んでくださいね」

恭子達が部屋に入った後、春水は自室へ移動し明日の予定を考え早めに休むことにした。

12話

全員で朝食を食べ食休みしていると恭子が昨日宇宙にあがるためにプロトレマイオス2に起きた現象を聞いてきた。

恭子

「霧島さん、昨日宇宙に来るためにアプロディアさんに指示を出したあと急激に艦の速度が速くなったのと、艦の前方に発生したあの緑色の光はいったい？」

その質問が気になるのだろう、佳織達が春水を見ている。

春水

「その質問に答える為にはまず艦の動力について説明しないとイケないですね。少し長くなりますけど構いませんか？」

恭子達が頷いたのを確認し、春水はアプロディアに頼みモニターに映像を流しながら説明を始める。

モニターには円錐形の物が映し出されていた。

春水

「これは太陽炉又の名をGNドライブと言います。それがこの艦の動力で、あの緑色の

光はこのGNドライブ内で作られるGN粒子とよばれるものです。この粒子は機体の動力になる以外にも電子機器に影響をあたえ、通信機器やレーダーを無効化します。尚、GNドライブは半永久的にGN粒子を発生させるためエネルギー切れは無いと言われていますが、GNドライブ内で発生するGN粒子の生産量が決まっているので、粒子を消費しすぎると機体の性能が下がってしまうので戦闘では粒子量に注意しないといけない」

唯衣

「GNドライブ……半永久的に稼働しているだけでも凄いの電子機器まで無効化するなんて……」

佳織

「粒子を半永久的に生産するんだろう。ドライブ内の容量を超えたらどうするんだ？外に放出するのか？」

春水は首を振り

春水

「いえ、機体にはGNコンデンサーとよばれる物がありGN粒子を蓄積させ戦闘に役立てています。コンデンサーがあれば粒子不足になりにくくなります」

恭子

「動力が凄いのは分かりましたし緑色の光の正体も分かりましたが、何故宇宙に向かうさいに艦の前方に発生させたのですか？動力、通信機器無効化以外にも使い道があるのですか？」

春水

「あの時トレミーの前方に発生したGN粒子は宇宙に向かうさいに発生する空気との摩擦が軽減するかもしれないから発生させました。まあ本来の使い方がわかりませんが」

上総

「本来の使い方ではない？」

映像が変わりモニターにはGN粒子を纏ったプロトレマイオス2が映りビームを弾いていた。

春水

「GNフィールド……本来圧縮した粒子で機体を覆うように発生させるバリアをこう呼びます。GNフィールドはビームや実弾兵器、近接攻撃を無効化出来ず。只、機体のGNドライブに強度が左右されるのでフィールドの強度を超える一撃やGN粒子を纏った実体剣で攻撃には弱いです」

志摩子

「あの光線級のレーザーはバリアを貫くのでしょうか……」

春水

「いやそれは大丈夫だよ。シミュレーターで何度もGNフィールドでレーザーを受けただから」

安芸

「…嘘……え、本当に？」

和泉

「な、何故受けたんですか？」

春水

「そりゃ今と違ってあの時はまだド素人だったから操縦技術が全然なくて、回避出来ないからフィールドを使ってしのいだりしてたからね」

恭子

「そういえば霧島さんの機体は緑色の光を放出していましたね」

春水

「はい。只、フィールドを発生するとGN粒子を大量に使うのであまり多様し過ぎてもいけないですが」

唯衣

「バウには搭載できないのですか？」

春水

「機体の作りが全く違うのと元々バウの作られた世界とGNドライブが存在した世界が違うから難しいね」

唯衣

「そうなんですか……」

春水は霧島達を見た後、一息つくか確認する。

春水

「次の説明する前に少し休憩しますか？」

恭子

「いえ大丈夫ですので説明を続けて下さい」

佳織達も頷いているので次に進む。

又モニターの映像が変わり、赤く光ったラファエルガンダムが映し出された。

唯衣

「あれは確か霧島さんの機体ですよね。でも色が違う？」

佳織

「機体が赤く発光しているのか？」

春水

「TRANS—AMシステム」

モニターを見ていた恭子達が春水を見る。

春水

「あれはGNドライブ並びにGNコンデンサーに蓄積されている高濃度に圧縮したのGN粒子を全面解放させることで赤く発光しています」

恭子

「解放するとどうなるのですか？」

春水

「モニターを見てください」

恭子達がモニターを見ると、映し出されていたラファエルガンダムが残像を残す程のスピードで動き回っていた。

安芸

「は、速い」

佳織

「目で追いきれん……」

春水

「全面解放したことで赤く発光し、機体の性能を通常の3倍にまで一定時間引き上げる

ことができます。しかし、時間がくるとシステムが解除され元に戻りますがGNドライブとGNコンデンサー内の粒子が大量に消費されるため、機体性能が低下するのでここぞというときに使用する切り札です。尚、俺の機体はGNドライブ並びにGNコンデンサーが改良されているので性能が低下しますが多少改善されています」

春水は映像を消し、モニターを見ていた恭子達に休憩することを告げる。

春水

「とりあえず休憩にしましょう。質問は休憩後に聞きます」

10分後

春水

「さて皆さん質問はありますか？」

恭子が佳織達を見て頷いてから春水に話しかける。どうやら休憩中に聞きたいことを纏めて恭子が代表して質問するみたいだ。

恭子

「聞きたいことをはたくさんありますが私達がすぐに理解出来ないと思いますから、私達に自身に関わることを聞きます」

春水

「確かにすぐに理解するのは難しいと思います。崇宰さん達に関わることが何なのかは分かりませんがどうぞ」

恭子

「では、私達がバウではなくGNドライブ搭載機に乗ることは可能ですか？」

春水

「……可能ですが無故そんなことを聞くのですか？バウでは駄目なのですか？」

恭子

「バウはとても良い機体です。世界中の戦術機では全く歯が立たないでしょう」

春水

「では何故？」

恭子

「生き残るため、ひいてはBETAに勝つためです」

春水

「なるほどしかしGNドライブ搭載機は独立部隊のみで使用する予定です。この技術はどの国にも渡すつもりはありません」

恭子

「では霧島さんの独立部隊に配属されれば乗ることが出来るのですね」

春水

「しかし崇宰さんや如月さんは既に部隊に配属していますよ。いきなり現れた俺の部隊に配属されることはないでしょう。それに崇宰さんは五摂家なんですから余計にありえませんか」

恭子

「それについてはもう心配ありません。既に殿下に頼みましたから私と如月中尉は独立部隊に配属が確定です」

春水

「……………は？」

春水は恭子の言葉をすぐに理解することが出来なかった。

恭子と佳織は自分達が所属している部隊にいずれは戻ると思っていた。

しかし既に配属が確定していると言った。

春水が呆けていると恭子が話しかける。

恭子

「配属が決まってるので私達は乗ることに問題はありませんよね？」

春水

「……………え……………あ、はい」

言質を取った恭子は続けてとんでもないことを言い出した。

恭子

「それに唯衣ちゃん達も既に配属しているのも同然ですから問題ないですよね？」

春水

「え、いや、それは流石に……」

唯衣達はまだ軍人ではなく訓練生であり学生であるから、流石に無理だと春水は思ったが、恭子が続けて告げる。

恭子

「唯衣ちゃん達は戦術機に乗る前からMSで訓練しているのですよ。卒業までここで訓練したらどの部隊の衛士にも負けないでしょうし、実力的にも問題ないでしょう。独立部隊に配属するのが早いか遅いかの違いだけですからGNドライブ搭載機で大丈夫です」

恭子の言葉を聞き、唯衣達を見ると皆真剣に春水の目を見ている。

春水はそれを見て諦めに近いながらも少しだけ抵抗してみた。

春水

「……しかしまだ唯衣ちゃん達の操縦技術では乗りこなせないのではないですか？……バウに慣れてからでも遅くないと思えますが……」

恭子

「確かにそれでもいいかもしれませんが慣れてからでも乗り換えるより、早めに高性能GNドライブ搭載機に乗って慣れた方がいいと思います」

春水

「……………わかりました」

春水の言葉を聞き唯衣達は喜んでいたが、春水は女性には口で勝てる気がしないと身に染みてわかった。

春水はアプロロディアに機体生産の変更を告げる。

春水

「…………アプロロディア、袖付きの生産はどうだ？」

アプロロディア

「今現在昨日指示を受けてから生産に取りかかり3機出来たばかりです」

春水

「そうか…………では袖付きの生産を中止。代わりにスサノオを1機、ガデッサ3機、ガラッゾ3機頼む。色はスサノオの白色の部分を着に。ガデッサは1機はリヴァイブカラーで残りの2機はヒリングカラー。ガラッゾはヒリングカラーをベースに白色の部分を赤にするのが1機、山吹にするのが1機残りはそのまま構わない。動力は疑似GNド

ライブからGNドライブに変更しておいてくれ」

アプロディア

「了解しましたがそれでは地球への帰還が遅れてしまいますが……」

春水

「それはしようがないだろう。機体の補充に来たのに何も積まないわけにもいかないから。連絡は崇宰さんにしてもらうから構わない」

アプロディア

「わかりました。では、生産に……」

春水

「ちよつと待った。アプロディア、疑似GNドライブからGNドライブに変えるが粒子の色は緑色じゃなく橙色に変更出来るか？出来るのなら俺のラファエルも変更頼む」

アプロディア

「変更は可能です。では全機粒子の色は橙色に変更しておきます」

春水はこれで今からアクシズの生産ラインにGNドライブ搭載機が生産開始されるんだなと漠然と思っていた。

アプロディアに指示が終わった春水に恭子が話しかける。

恭子

「霧島さん、とりあえず機体の説明と同時にシミュレーターで訓練をしたいので移動しませんか？」

恭子達は新しい機体に胸を踊らせているのか楽しそうにしていた。

春水はそんな恭子達に連れられシミュレーター室に向かうのだった。